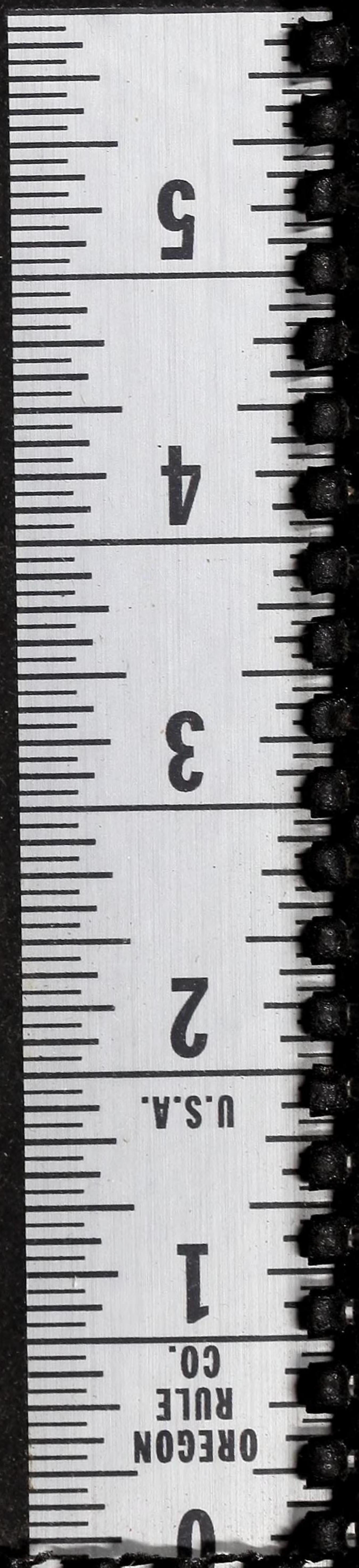


研究會



OREGON RULE CO. U.S.A.

332907

プロレタリア科學研究所 中國問題研究會譯

マ
デ
ア
ー
ル
著

中國農村經濟研究
(上)

回

林
子
可
成
成

山
山

李強

Madjar, L. (Ludwig)

マデアール著

プロレタリア科學研究會

中國問題研究會譯

中國農村經濟研究(上)

一九三一年

希望閣刊

HD2067

.M2616

1931

vol. 1

copy 1

Asian

Japan

Cage

LC Control Number



2001 534935

目次

著者から……………	(一)
編輯局の序文……………	(三)
邦譯版について……………	(二七)
序論 アジア的生産方法と帝國主義……………	一
第一章 中國の統計……………	二九
第二章 水の意義……………	六
第三章 土壤の貧瘠化防止の鬭争……………	一〇八
第四章 黄土帶……………	一三三
第五章 中國の農村經濟に於ける牧畜の作用……………	一五一
第六章 手工勞働……………	一八〇
第七章 拓殖區域……………	二〇〇
第八章 中國土地私有制の性質及び形態……………	二二九
第九章 中國土地私有制の性質及び發展……………	二六八

著者から

讀者が本書によつてすべての疑點を一掃すべく期待されるならば、それは著者の恐縮に堪えないところである。本書は單に中國農村・土地問題の研究にとつてその發端を與ふべく企圖したものであり、いはゆる中國農村・土地問題の解決の初歩とは甚だ遠いものである。

本書の構成は、全體的な中國農村經濟の特徴を出發點として、順次、土地關係・階級分化・市場及び帝國主義の影響等の分析に論及してゐる。かゝる構成上の方法は、或ひはある種の正當なる批判を呼び起すことであらう。しかし、必要なる材料並びに考證の缺乏といふ我々の際會した状態の下で、これ以外の他の方法を採用することは、おそらく一層困難な境地に陥つたことであらう。また分析の方法に、幾多の根據・引證・附註をまじえることは、讀者の研究に對して、むしろ妨害を加へるであらう。しかしながら中國問題に論及するに當つて、確實な事實と精確な統計とが全然缺如してゐるために、我々が事態の本源にさかのぼつて論ずる場合、もしも特に明かに疑はしい點がないかぎり、それを最良のものとなせねばならないのである。たゞ事實そのものによつて説明し、些かも推測を加へずに考察し結論するならば、それは最も適當なことと言ひ得るかも知れぬが、我々は飽くまでも問題を提起するばかりでなくてこれに解明を加へることが最も正確であると考へる。たとへ提起され解明さ

れたものが、間違つた立場からであらうとも、問題の解決を得るためには、沈黙してゐるよりもよいと考へる。

本書の幾多の缺點の中で、讀者も感ずるであらう如く、特に若干の狀勢についての記述が正確を缺いてゐる。中國の軍閥戦争の下での材料蒐集と研究とは、おそらくは餘り完全なものであり得まい。しかし、幾多の問題を説明するために、價值ある若干の考察を得ることが出來た。この仕事の主要な部分は、困難な、苦痛に充ちた條件の下で奮闘してゐる二三の同志が、幾多の經驗・觀察・目撃の中から、生み出してくれたものである。この點に關して、著書は特にヴォーリン、ヨルク、タルハノフ、テリーナ、セイフリンの諸同志の名を明記して感謝せねばならぬ。多くの中國の共產主義及び農民組合の闘士も色々な點で著者を助け、指示してくれた。彼等の經驗・考察及び提供してくれた材料によつて、著者は種々なる重要問題を研究し得た。然しながら、材料の整理及びその評價とそれからの結論づけに關しては、著者が責任を負ふものである。

現在中國共產黨は血を流しつゝ、最良の闘士を犠牲にしつゝ、野蠻な血に飢えた、かつ殘酷な反革命及び帝國主義の銃火の下に、この土地革命の闘争——即ちこの土地關係について我々は書かうとしたのである——を行つてゐる。我々は英雄的な×に——その指導下に中國のプロレタリアートが多くの大衆を従へながら、これらの土地關係の殘存物からのがれ出る時の遠くないことを信じつゝある彼女に——この書をさしあげる。

—著者—

編輯局の序文

中國問題研究所發行の同志、エル・マデヤールの勞作——『中國農村經濟研究』は、現代中國に於ける農業諸關係のマルクス主義的分析の、最初の眞面目な試である。中國に關する我がマルクス主義的文献が、如何に貧弱であるかと云ふことに就いては今更言ふ必要がない。現代並びに古代中國の根本問題の眞面目な深刻な研究に對して、我々は今やうやく着手したばかりである。此の關係に於いて、同志マデヤールの勞作は中國に關する我がマルクス主義的文献への、價值ある寄與として認められねばならぬ。同志マデヤールの著書の中に、吾々は現代中國農村に於ける獨特の經濟諸關係の、具體的な見取圖を描がいてゐる一聯のすばらしい頁を見出すことが出来る。著者は中國に關する最古より最新までの文献中の價值ある總てのものを誠實に利用し、自分の著書を豊富な實際的資料に依つて満たしてゐる。

本書の大なる價值をなすものは、中國の現代農業制度の根本的特殊性の理論的分析を、中國の歴史的過去の獨自性の見地に立つて、與へやうと試みたことである。然し乍ら著者の此の試みは完全に成功してゐるとは云へない、ことを注意する必要がある。

例へば、この勞作の「序論」に於いて同志マデヤールは中國の史的發達に對する自己の基礎的な諸

見解を、次のやうに公式付けてゐる。『帝國主義は中國に於いて、如何なる社會、如何なる生産方法に出遇つたか』と云ふ問題に對して、同志マデヤールは次のやうな解答を與へてゐる。『マルクスの見解に依れば、中國に於ける植民政策がアジヤ的生産の經濟的基礎を破壊したものであると云ふことは何等疑の餘地がない。』（傍點は編輯局）著者は他の箇所でも次のやうに云つてゐる。アジヤ的生産方法の『外殼と殘存物は今も尙ほ中國を抑壓しつゝある。』

著者は、著書全體に亘つて様々の形態で此の定義を幾度も繰り返し、それを中國の獨特の社會制度の理論的分析の基礎として掲げてゐる。（註一）

（註一）即ち或る箇所にて著者は次のやうに云つてゐる。『帝國主義は、中國の商品經濟を擴張し深化しやうとする試に於て、中國經濟の國內制度の頑強な抵抗に、即ちアジヤ的生産方法の抵抗に衝突した。』（傍點は編輯局）又他の箇所でも云つてゐる。『次の諸草に於いて我々は、アジヤ的生産方法の上に立てられた中國の土地關係の特徴を分析するであらう。』（傍點は編輯局）

斯くして中國の過去の支配的な社會制度は、同志マデヤールに在つては東洋的社會制度（アジヤ的生産方法）として規定されてゐる。資本主義は中國への滲透に際して、此の社會制度と衝突した。そして既に資本主義が急速に發達した現在の狀勢に於ては、此の制度（註アジヤ的な譯者）の殘存物と殘滓は『我々の眼前に於て解體しつゝあり』且つ『今も尙ほ中國を抑壓してゐる』。斯くしてその主張せられてゐるところによれば、現代の中國の社會制度はアジヤ的生産方法から、資本主義への過度で

あるといひてゐる。同志マデヤールのこの概念は、中國に關する現代のマルクス主義的文献の中に強固に確立せられてゐるところの、現代中國の社會制度を、獨特な中國の封建制度の數多くの殘存物と、殘滓をその中に包含して發達しつゝある資本主義制度として、取扱つてゐる他の概念と對立してゐる。

然し、先ず著者がアジア的生產方法を如何に規定してゐるか、と云ふことを検討して見やう。同志マデヤールは其の『序論』に於て、アジア的生產方法と他の前資本主義的社會諸形態と比較して、次のやうに云つてゐる。『東洋社會の發達の出發點をなすものは、即ち、氏族制度、民族的・宗教的、若しくは村落共同體であるが、然し東洋に於てはこれに加ふるに農業の第一條件をなすのが、人工灌漑であるといふことである。』『給水の計畫的調整が——と著者はエフ・エンゲルスを引用してゐる——共同體若しくは地方の若しくは中央の政府の事業である。』

『アジア的生產方法は——と同志マデヤールは他の箇所云つてゐる——或る歴史的、社會的諸條件の下で發生した、即ち農業生產の諸條件が東洋に於て特徴的な諸前提をなしてゐる地方に於て發達し得た。然し一切の諸條件の下で其の基礎には土地の國有が存在してゐた。』（『序論』一三頁）中國に於ける古代東洋社會の重要な基礎をなすものは『土地への私有の缺如である。』（『序論』一三頁）

同志マデヤールは其の『序論』に於て、アジア的生產方法を古代及び封建的生產方法と比較し乍ら『一切の前資本主義的生產方法は、即ち農業と工業との結合が、それ等（一切の全資本主義的生產方法）によつて共通の基底をなしてゐる』と正當にも述べてゐる。農村の共同體的制度は、アジア的生

産方法にとつても、又古代及び封建的生産方法にとつても同様に、極めて特徴的である。

斯くしてアジア的生産方法の特殊な特徴をなすものは、共同體制度（『全く閉塞的な組織を持ち、各自給自足的小世界をなす村落共同體』——カー・マルクス）の支配ではなく、『農業と工業労働の結合でもなく』て、即ち農民の餘剰生産物の搾取の一定の形態（地代——租税）に照應するところの、アジア的社會にとつて特徴的な、土地所有の形態（土地の國有）である。

アジア的生産法の根本的な特徴としての土地の國有の強調を、我々はカー・マルクスとエフ・エンゲルスの幾多の主要な勞作の中に見出す。（註一）

註一、カー・マルクス、『資本論』一卷一一三——一一四頁。『資本論』三卷二部三二七頁。カー・マルクス、『剩餘價值學說史』三卷三四〇頁。カー・マルクス『印度に關する手紙』マルクス主義年鑑第三卷四〇——四四頁。エフ・エンゲルス、『反デューリング』二部二章九四——一〇〇頁。カー・マルクスとエフ・エンゲルスの手紙、一九二二年出版五〇——五四頁。エヌ・レーニン全集、九卷四二六頁。ゲ、ブレハーノフ『ロシア社會思想史』一九二六年出版七二——七九、一一一頁等々。ストックホルムに於ける第四回合同大會に於ける農業問題に關するレーニンとプシハーノフの論争、『ストックホルム大會のプロトコール』。

然し先に特徴付けられたアジア的生産方法の殘存物と外殻は、現代中國に於て如何なる具體的形態に於て我々の前に現れてゐるか？

幾多の章を通じて同志マデヤールに依つて叙述せられた現代中國の農業諸關係の見取圖は、先づ、

第一に尖鋭な階級對立と土地の獨占者——中國の地主達——に對する土地を持たぬ廣汎な數の農民大衆の尖鋭な鬭争、を我々に闡明してゐる。

其の一切の特殊な特徴（大土地所有の微々たる發達、地主の中に於けるブルジョアの所有形態の優勢等々の下で、地主的土地所有と農民的土地所有は、現代中國に於ては強固に設定せられた制度となつてゐる。中國の幾多の地方に於て、我々は數千萬の農民——所謂小作人と半小作人——を見出すが、彼等は半封建的形態に於て、農民——生産者——は餘剩生産物を搾取しつゝある（多くの場合又必要生産物の部分をも搾取しつゝある）土地所有者の奴隸的從屬の下にある。

こゝでは我々は農業國としての現代中國の經濟的基礎に直接照應する所の、中國の政治機構に存する幾多の封建的殘滓（督軍制度、國が各々獨立の、そして相互に敵對しつゝある地方に分かれてゐること等々）に就いては論及しない。

然しアジア的生產方法の見地からは、これ等の現代中國社會制度の本質的な特質を如何に規定すべきであるか？

後れた現代中國の經濟的基礎を形成する、地主的土地所有と農民的土地所有は、アジア的生產方法と直接對立するものであり、反對に封建社會のすべての特質を持つてゐる。そして現代中國の農村に存在する搾取形態は、土地の私有に基づくものであり、農村に於ける資本主義的諸關係の發達の下では、過去に支配しつゝあつた前資本主義的生產方法の特殊性がその根據となつてゐるものではない。

それ故に我々には半封建的諸關係（半封建的及び半資本主義的關係）として以外には規定することは出来ない。

この見地から、我々にとつて極めて興味あるものは、アメリカに於ける封建制度の問題に關するレーニンとヂンメル（スハーノフ）との論争である。アメリカに於ける封建制度の缺除に關するスハーノフの斷定に對する回答に於て、レーニンは社會制度の一定の歴史的形態としての封建制度が、アメリカに無かつたにもがくはらず、南アメリカ諸國に於ける半封建的諸關係の現存が實證されたと述べてゐる。レーニンはネグロ『小作人』が實際にはロシアの農民若しくは地主の下にある小作人と同様に、土地所有者への半封建的從屬の下にあると云ふことを示してゐる。レーニンはアメリカの『小作法』を『典型的にロシア的な』『本當にロシアの義務耕作制度』と呼んでゐる。『我々の前には——とレーニンはネグロ小作人に就いて語つてゐる——殆んど半封建的な若しくは經濟諸關係に於ては同様な、半奴隸的『小作農』が存在する。』

斯くしてこれら二つの半封建的搾取形態の歴史的發生（アメリカ、南アメリカ諸國に於ける奴隸所有制度と、ロシアに於ける農奴制度との）が全く異なるものであるとはいへ、レーニンはそれらの共通的な本質、即ちそれらの半封建的性質を指摘することに依つてそれらを全く同一種類のものに見なした。

中國に於ける地主的所有と小作關係の問題に對する、理論的分析を行ひ乍ら、同志マデヤールはこ

これらの現象を封建的諸關係の要素として特徴づけられ、それらを獨特の特殊な東洋的特徴（即ちアジア的生產方法とのそれらの結合の見地に於ける）に歸せしめやうと試みてゐる。

『タタールとモンゴールの征服者、明朝と滿洲族の清朝は——と著者は云つてゐる——征服者の氏族或は皇族の成員の爲に身分的土地所有もしくは民族的士地所有を打ち立てやうと試みたが、然しこの試は廣汎なる規模に於て身分的大土地私有制度を確立し得なかつた。名門貴族の大所有地は或は、民衆の蜂起に依つて廢棄せられ、或は商業高利貸資本によつて解體せしめた。これ故に地主的土地所有の細分の結果、中國の土地關係に於ては中小地主が優勢を占むるに至つた。封建型の大地主ではなくて、高利貸商人、若しくは官僚出身の中小地主達が、地主階級の中心人物となつてゐる。』

我々は中國の地主の歴史的起源が、西歐の或る國々に於けるものと異ると云ふことに就いて、論争しやうとは思はぬ。然しながら、中國の農民が身分的、大地主によつてではなく、官僚出身の中小地主によつて搾取されてゐると云ふその事實は、その搾取の方法其れ自體と、農民の餘制生産物搾取の形態を、少しも變へるものではなく、又このことによつてその封建的性質を少しも失うものではない。 ロシヤに於ても亦、その地主は、官僚出身であつたではないか。（レーニン——官僚的土地所有の歴史的轉化形態としてのロシヤに於ける地主的土地所有、レーニン全集、第九卷五三六頁參照）。而して我々は農奴改革前のロシヤの農奴制度を封建的制度と名づけ、農奴改革以後のロシヤの半農奴的制度を半封建的制度と呼んでゐる。土地私有の獨特の形態としての中國の地主的土地所有を、獨特の東洋的

特質に歸する場合に、若しもこの規定に於ける『東洋』と云ふ言葉が狭い地理的意義を持たず、又或る經濟的意味が無いとするならば、その場合東洋社會の特徴となるものは即ち土地私有の缺如であると云ふことを、一般に指摘しなければならぬ。『調稅吏（東印度の地主の一種 Zeminder を指す——譯者）と世襲的小作人が等々とカー、マルクスは書いてゐる（註一）——如何に下賤ではなくても土地私有の二つの異なる形態を現はすものであり、アジア的社會にとつては知られてゐない現象である。』（傍點編輯局）しかし封建的社會にとつては全く知られてゐる現象である、と云ふことを我々は付け加へたい。斯くして中國に於ける地主的所有の封建的本質の默殺、獨特の中國の地主的所有を『東洋的』特質に歸すること、及びこれらの特質を地主的所有の封建的性質に對立せしめることは、マルクス主義理論の根本的な基礎と直接矛盾する。

（註一）マルクス「印度に關する手紙」マルクス主義年鑑第三卷

中國に於ける小作關係に關しても、著者はこの關係を或る獨特な、あたかも特殊的な東洋的特質（即ちアジア的生產方法の殘存物と直接に關係を有するもの）に歸してゐる。

『同時にヨーロッパに於て——と同志マデヤールは述べてゐる——地主或は封建的領主が極力農民を束縛する方法を設けたやうに、中國に於て——回々教の東洋に——於ても亦同様に小作人は永久小作權をもつて自己を束縛した』。だが『中國の小作關係にとつて一般に特徴的なのは普通一般に云はれてゐる様な小作農ではない——と著者は續けてゐる——蓋しかゝる小作農は現代に於てさへも南アメリ

カ、フランス、イタリー、ハンガリーに依然として全盛を極め擴大しつゝある。中國にとつて特徴的なものは、即ち獨特な中國的若しくはより正確に云へば、永久小作の東洋的形態である。』(傍點著者)

先づ第一に皆摘しなければならぬことは、中國に於ける小作關係の支配的形態としての永久小作の承認が、今以て尙ほ全く實證せられてゐないと云ふことである。一方に於て永久小作の形態其自體は、それが自らの中に農奴制の一切の特質を持つてゐると云ふこと以外には、東洋(東洋的生產方法)にとつて、又特殊的には、中國に於ける農業諸關係の特殊な東洋的特質にとつても、少しも『特殊的な』形態を爲すものではない。その限りに於て、この小作形態はヨーロッパの封建制度の歴史の中に(其の没落期に)最も普及せる形態の一つに過ぎないものである。然し『中國農村經濟研究』の著者は、永久小作を獨特の中國的形態として述べてゐる。かゝる獨自性(同志マデヤールの分析に於ける唯一の)として、永久小作の獨特の形態——即ち『共同土地所有』(中國の相當の領土に普及せられてゐるもの)が述べられてゐる。然しながら『共同土地所有』は、封建的諸關係と全く同時に存在し、且つヨーロッパに於ても存在したと云ふことを注意しなければならぬ。

他方に於て、『共同土地所有』は中國にとつて特徴的なものであるとはいへ、然かも何よりも重要なことは、それが何等特殊な經濟範圍をなしてゐないと云ふことである。一、地上の所有と、二、地下の所有との區分は形式的であり且つ象徴的である。共同的土地所有の本質は領有者間に於ける土地の二ツの層の所有權分割にあるのではなく、外的な法的虚構をなすものであり、一つの餘剩生産物

の分割にある。

斯くしてアジア的生産方法から、資本主義への過渡的的制度として、現代中國の社會經濟制度を特徴づけることは、（よし、我々が資本主義の中國への定着以前の中國が、アジア的生産方法の典型的な國であつたと云ふことを條件付きで認めるにしても）現實には完全に照應し得ないものである。何んとなれば、土地の國有、共同體制度の支配、農業と工業の家內的結合等々が、アジア的生産方法の最も本質的な諸特質が、中國に於ては全く現實には存在してゐないか、（例へば、土地の國有のやうに）或ひは殆ど存在してゐないか、（例へば、共同體のやうに）又は中國の經濟に於ては幾分でも本當の意義（例へば、農業と工業の家內的結び付きのやうに）（註一）を失つてゐるからである。

註一、我々は此處では古き過去の一切の特質を保存しつゝある所の、現代中國の農業技術に關する問題には全く觸れずにおこら（灌漑農業、施肥法、手營労働が支配的であること等々）。然しながら、よし、アジア的社會としての中國の前資本主義的制度的條件的承認から出發するにしても、此の場合殆ど變化をこらむらずに古い農業技術が現代に於てもなほ存續し續けてゐる。併しこの點は中國の現代の經濟制度にアジア的生産方法の何等特殊な特質を附加するものではない。何んとなれば中國の過去に於て、この技術が他の生産方法（奴隸所有的經營）と全く同時に存在し、且つ現代中國に於ても半封建的な農民の搾取形態と全く同時に存續し續けてゐるからである。

『中國に於ては、帝國主義の侵略以前に於て既に、商業、高利貸資本、地主的暴力とアジア的專制政體

の官僚主義によりて、如何なるアジアの國に於てよりも、基礎のより強固な、より強力な氏族及び村落共同體が破壊された、と云ふことを強調しなければならぬ、』と著者は云つてゐる。

農業と工業の結合に關しては帝國主義は此の關係に於て、中國のかゝる革命を促進せしめた。然しながら現代中國に於けるアジア的生産方法の幾分でも本質的な、殘存物の消滅に關する問題に於て、決定的なモメントとして認めなければならぬものは、東洋社會の最も重要な特質として知られた土地の國有の現代中國に於ける全き缺除である。反對に現代中國に於ける土地所有の支配的形態をなすものは、土地私有である。これと結び付いて無條件的に正當であり、且つ中國の政治的經濟的現實に全く照應せるものは、封建制度から資本主義への過渡的の制度としての、即ち封建的搾取形態とブルジョア的搾取形態との接合を現はす社會的諸關係の制度として、中國の現代の制度を規定することである。

中國の封建制度は、現代の中國の現實性に於ても尙ほその個々の特質が生々と存在し、然も強力であり、他の諸國の封建制度との比較に於て自らの特殊性をもつてゐると云ふことは全く論争の餘地がない。然しながら西歐の『典型的』封建制度の國々に於ても様々なる國々が自己の獨特の封建制度を経験したと云ふことは周知の事實である。獨特の歴史的諸條件の中に發展して來た中國の封建制度も亦當然に其の獨特の特質を持つてゐる。

然しながら中國の封建制度の特殊性とは如何なるものであるか？

これらの特殊性は若しも我々が中國の歴史の過去に目を向け、たとへ最も一般的な特質に於てでも

それを特徴付けやうとする目的を持つならば、我々の前に全く明白に存在してゐる。

たとへ其の叙述が其處では證明にとつて全く反對の斷定に到達してゐるとは云へ、本書の中に引用した所の、過去の中國に關する叙述は、全く利用するに足るであらう。

先づ第一に注意しなければならぬことは、中國に於けるアジア的生産方法の解體が、著者の記してゐるやうに、中國への外國資本の侵入と同時に始めて初つたものではない。

『中國に於ては帝國主義の侵略以前に既に——と著者は云つてゐる——商業、高利貸資本はこの生活組織を轉覆し且つ崩壊せしめ、東洋社會を破壊せしめ、アジア的生産方法を轉覆せしめた。』又他の箇處で、著者は『商業資本並に高利貸資本は、それ自身中國に於ける古き東洋的社會と、其の重要な基礎、即ち土地の私有の缺除を解體せしめ、生産關係即ち財產關係を解體せしめた。』と云つてゐる。

然しながら、商業資本と高利貸資本は、幾多の世紀に渡つて既に中國に於て存在して居つたし、且發達しつゝあると云ふことに就ては周知のことである。この事情は次のやうな結論をなさしめる。即ち中國に於けるアジア的生産方法の解體は、長き過程をなしてゐる。且つ中國に於ける土地私有の存在も亦、古き歴史的過程をもつてゐると云ふことである。そして我々は、中國の歴史的過去を描いてゐる次のやうな實際的な資料を見出す。

『秦朝は共同體的土地から分割經營への過度を形成した。そしてこのことに依つて私的土地所有に端緒を與へた。』

『漢朝初期の皇帝の世代には、農民への割讓地は、國家に依て『贈與せられたもので』、或る程度迄は、尙『家族的所有』として見做されてゐた。然しながらすぐに農民達が自分の土地を地主、商人、官吏達に質入し且賣り拂つたと云ふことを我々は知つてゐる。』(一四一頁)

『唐朝の時代に……商業——高利貸資本の支持の下で私的土地所有が設定せられた。……そして更にこの事と結び付いて……『その村落共同體の強力なものゝ恣意及び租税と徵發の過重は、農民をして地主の許へ逃避せしめ、彼等の下で小作人となり、彼等の下で支持と擁護を求ることを餘儀なくせしめた。飢餓と自然的災害、高利貸は、この過程を促進せしめた。農民的所有の形成は農民の半農奴的。半奴隸、小作人的地位への轉化の諸前提をつくり出した。中國の歴史の異つた時期に、全く様々な諸形態で色々な朝廷の世代に、これらの過程は發生したが、全國的な大反亂、全國の荒廢と滅亡に依て中斷せられた。』

我々は他の箇所でも次のやうなことを讀む、『かくて滿洲族に依る中國の征服が中國の或る地方(首都の周圍と直隸省)に於て封建組織に類似せる土地所有を國有地の形態で實現した。かやうな現象は、中國に於ては魏朝の中國の征服の時代にも、蒙古族の時代にも存在してゐた。』(一二四頁)後の滿洲族の朝廷に關して著者は他の箇所でも次のやうに云つてゐる。『滿洲族の朝廷(清朝)は十餘年間續いた農民の反亂との鬭争によつて、權力を握つたが、其權力は、農民に依て未だ根絶せしめられなかつたところの、明の封建制度の殘存物と、滿洲族の軍事貴族とのプロツクであつた。(註)』

(註) 同様な斷定を我々はまた、ケーラデツクの勞作の中に見出す。『中國に於ける革命運動史』第三講。

『滿洲族は、人民、農民反亂の征服者として中國にやつて來た。そして明朝の封建貴族とのブロックに基いて權力を握つた。』然しながら例へば、中國の歴史を封建制度の歴史として描きながら、しかも國家權力の中央集權化の著しい基礎をなす所の、中國に於ける人工灌溉の役割を誤つて否定したケー・ラデツクのこの勞作では、この明の封建制度に關してのみのべられてゐるが、この定式化は、その全内容に於てこの問題の一般的な分析がほとんど述べられてゐない。著者はマルクスの當該原文をスコラ的に歪曲し、封建制度以外に他の如何なる意味をも又意義をも持てゐない古代中國と現代中國の社會制度の諸特質を『封建的』と云ふ言葉で呼ぶことをさけてゐる。

斯くして、吾々は引用した資料から出發して、中國に於ける土地私有が既に秦朝の世代に形成せられたものであることを認める。我々は殆んど總ての朝廷に亘つて大地主的土地所有の存在を認める。我々は地主の許への農民の逃避と彼等の半奴隸的、半農奴的狀態を、滿洲族及び明の世代の封建的諸關係等々を認める。我々は此處で、中國に於ける古典的な封建制度の長期間(周朝の時代)の存在を著者が眞向から否定してゐないと云ふことに就ては觸れずにおかう。事實或る箇所にはこの事情に就て或る疑を抱き乍ら他の箇所には無條件で、周の五侯を封建的領主と呼んでゐる。

中國の過去に於ける封建的諸關係の存在を實證してゐるこれ等の分散的な歴史的資料が勞作の或る箇所にて著者に依て、より決定的な體系的な形態で説明せられてゐる。

『史的發達の行程に於て、中國に於ける土地關係は、有りと有らゆる變化を経験して來た。大土地所有が土地所有の支配的形態であつた時代もあつた。漢及唐の末葉、特に宋及明朝の支配の末期にも同様であつた。』(傍點編輯局)

これらの定義のより一層決定的な表現を我々は二二二頁に見出す。『若しも中國の國內史を現代迄餘す所なく追究するならば、中國の歴史は小土地所有と大土地所有との土地用益權の鬭争に歸するものである。そしてこの場合この鬭争は小生産者、そして屢々高利貸資本と商業資本に對する大土地所有者の更に進んだ鬭争を伴ひ、それに依て更に尖鋭化されたと云ふ事が明白になる』と著者は書いてゐる。(傍點編輯局)

此の場合、これらの個々の斷定と替る／＼に著者が一度ならずも本書の文中に於てカー・マルクスとエンゲルスの次の様な定義を繰り返してゐると云ふ驚くべき事柄に、注意を向けなければならぬ。即ちその定義とは『東洋に於ける一切の土地制度の基礎は……其處に土地私有が無いと云ふことに根ざしてゐるものである』。そして『土地所有權の缺除は、實際に東洋全體に對する鍵となつてゐる。』等々……

斯くして中國に於けるアジア的生産方法は、一方に於ては著者によつて、土地の國有に基いた(即ち土地の私有の缺除に基いた)社會制度として規定せられ、他方に於て、この社會制度の内容は(『中國の國內史』)大土地所有と小土地所有の鬭争として規定せられてゐる。

アジア的生産方法の諸範疇の活用は、中國の具體的な歴史的現實との矛盾に陥り、これが爲にこれ等の範疇は常に空虚な、生命のない、現實から切り離された抽象として空中に游離してゐる。

それと共に、理論的規定と具體的現實とのこの矛盾は、本書全體に互つて消滅してゐない。而も著者はこの矛盾の解決に向つて努力を費してゐない。この矛盾はアジア的生産方法の理論的規定其物が、著者に依て極めて不充分に、又不正確にしか爲されてゐないと云ふことに依て更に深められてゐる。アジア的生産方法の本質に對する自己の理論的諸見解を發展せしめてゐる所の勞作の中の特殊な方法論的部分（『序論』）に於て、著者は、マルクスに従つて、アジア的社會を、小生産者組織（共同體）に對する政府の權力の物質的基礎が、社會施設の指導、先づ第一に、給水の調整であるところの社會であると規定してゐる。この給水の調整は所謂土地の國有の爲に基礎をつくる。だが、それと共に、アジア的生産方法の分析の根本問題——アジア的社會の階級機構に就ては、著者から何らの解答をも受けてゐない。

『序論』に於て、様々な前資本主義社會形態を、資本主義に對する其れ等の諸關係に於て比較しながら、著者は生産諸關係の比較せられつゝある諸形態の各々（奴隸所有制度——奴隸と奴隸所有者の關係、封建制度——封建的領主と農民の關係、資本主義制度——資本家と賃労働者との關係）を明瞭に特徴付け乍ら、而も、相變らず東洋專制制度の階級的分析を回避してゐる。

著書は自己の分析のこの中心點に於ては、抽象的な斷定に局限されてゐる。『各社會制度は——と

著者は云つてゐる——それ獨特の階級を持つてゐる』これ故に『東洋社會に於ても此社會特有の階級を探究すると云ふことは、全く正當なことであらう。(?!編輯局 一五頁)或は、アジア的社會の階級に關する直接問題に對して、著者は次のやうに答へてゐる。『帝國主義は中國に於て地主、商人、高利貸官僚との結合によつて一個の支配階級となつた。』

斯くて、帝國主義侵略期以前、即ち彼の分析 (『帝國主義は中國に於てアジア的社會を崩壊せしめた。』)によれば、アジア的生産方法がいまだ全く自己獨特の特質を保存してゐた時代の中國に於ける、アジア的社會の現實的な階級機構を全く不明のものとして殘してゐる。其と共に、我々は中國の現實的な歴史及び著者自身の斷定に基いて次のやうなことを知り得る。即ち我々は地主、商人、高利貸及び官僚を啗に中國への帝國主義の侵入前に於てのみならず又、秦朝に先行する時代に於ても尙ほ見出すことが出来る。

この勞作の他の箇所 (『農村に於ける階級に就いて』の章)に於て著者は『階級の分析は私の任務ではない。』と單純に聲明してゐる。其れと共にアジア的專制政體の官僚階級に關する問題に觸れてゐる章に於て、著者は此の官僚を『階級?!』として規定し、其の際『中國の官僚は基礎をもたない階級ではなかつた。(?!——編輯局)』と云ふことを強調してゐる。

彼の勞作の中心問題——アジア的生産方法——の分析に於ける上述の缺陷が、著者の一切の理論的設定を混亂的にし具つ矛盾にみちたものたらしめてゐるのであると認めなければならぬ。

然しながら、中國の歴史的過去の根本的特殊性の、現實的な意味とは如何なるものであるか？

人工灌漑の創設といふ社會事業の必要が、中國に於ては國家の中央集權化に物質的な基礎の役割を演じたのであると云ふことは全く論争の餘地がない。此の場合、中國の土著住民と遊牧民との過去に於ける不斷の衝突の諸條件に於て、遊牧民との鬭争も亦中着の專制政的中央集權化に對して、大なる刺戟をあたへた。古代の最も偉大なる記念物——萬里の長城、皇帝の大運河——は恰も中國々家の中
央集權化の二つの基礎の生ける實證物となつてゐる。氏族制度の崩壞の廢墟の上に發達した中國の封建制度は、農業種族と氏族の、從服の結果（周朝の時代に於て）、中國の特殊な歴史的及び地理的諸條件に於て、ヨーロッパ的封建制度の形態の方向に向つて發達することが出来なかつた。

この特殊な歴史的及び地理的諸條件は、周朝の時代より繼いでゐた（この時代は封建的な紛争の時期である）在來の封建的領主の場所に、封建的領主の新形態——官僚的土地所有者——を形成したが、彼等は從來の封建的領主の獨立性の諸特質を著しい程度で失つてゐる地主であつた。そしてこの事と關聯して、封建制度全體に、中央集權的『國家的』封建制度の諸特質を付加した。斯くして周の封建制度の解體の諸條件に於ける、中央集權的國家（秦朝）の設定は、本質としては——封建制度の、一ツの形態から他の形態への推移であつたのだ。

封建的貴族階級の場所に、封建的貴族階級は一切の特質を保持してゐるところの封建的な官僚階級が現れた。而かもこの封建的官僚階級の出現は、封建的貴族階級の存在を廢棄しはしなかつた。周時

代以後の中國の社會制度は斯様にして構成せられた。

秦朝の中央集權的國家創設の重要な基礎として役立たたものは、灌漑組織ではなくて遊牧民との鬭争であると云ふことを指摘しなければならぬ。(國家的義務勞動の廣汎なる組織的體系(官僚的組織系統)を要する萬里の長城は、まさにこの時代のものである)。

この時代に於ける國家中央集權化の基礎の一つとなつたものは、又、商業資本と貨幣關係の相對的發達である。秦の時代に於て、小農民所有を併吞せる商人と、地方官吏出身の大土地所有者の特別の層組織され初めてゐたと云ふことが、以上のことによつて説明される。

中國の歴史的發達に於て、この集中的諸傾向は、必ずしも古代中國の社會制度の完全な見取圖を與へるものではない。國家的封建制度の發達の諸條件に於いて、國家の集中的傾向に、官僚貴族階級の遠心力的な(地方的な)世襲的傾向(世襲的大土地所有の確立の企畫)が對立した。この分離主義的な傾向は、商業資本の發展の條件の下に於てとあり、又其の下に於て特に著しい傾向であつた。一方に於て中央集權的國家の新しい基礎(土地所有者『拋棄』の國家權力の、土地所有者と商人との權力によつての置交替)を準備し、他方に於て、原則としては、國家的封建制度の基礎(土地の國有)を轉覆し、ますます私的土地所有の制度(大地主的土地所有の設定)を強固にした。この場合、地方官吏達に依て歪められた國家租稅制度は『地方的』封建制度を醸成し、破産せる農民を、土地の私的所有者——商人、官吏、及び彼等の多くの近親者(『權威ある人々』)の懷へ押しやつた。

國家的封建制度と地方的封建制度の是等の矛盾の中で、中國の過去の社會制度は發達した。商業、高利貸資本の發達に應じて次第々々に國家的封建制度の基礎に龜裂が入り、そして國家的封建制度が、ますます崩壊して行くに連れて、中國の社會制度は、歴史的にはより後れて發生した西歐の封建制度の形態にますます接近して行つた。

しかしながら中央集權的國家權力は、官僚貴族の世襲的地方割據の傾向と鬭争を遂行した。武帝の時代に封建的特權の世襲的確立と土地私有的諸公の分權的傾向の活躍を避ける爲に長子權が廢棄せられた。これに基いて中國には考試制度、一連の官僚的封建領主の權力に特殊な制限が加へられ、其等の制限は地方的封建制度の強化と鬭争すべき使命を持つてゐた。

それと共に、中國の全史に亘つて大土地所有は國家的土地所有と並んで存在し続け、封建的大所有地は官僚的土地所有と並んで存続し、屯田制・小作制農奴制及奴隸制は、國家的義務勞動と並んで存続した。これと關聯して我々は、封建的國家が、世襲的封建的領主に轉化せる所有者の家族の前に全く降服してゐると云ふ事實を中國の歴史のうちにしはく見受ける。

斯くして中國の歴史は、獨特の封建制度——原則的には他の諸國の封建制度と區別せられない、——アジア的專制政體の特殊的な性質に依つて、單に歴史的に複雑にせられたに過ぎぬ、封建制度の見取圖を我々の前に描いてゐる。この場合歴史的に現代に接近するに従つて、アジア的專制政體の特質は中國の封建制度に於てますます其意義を失つて行つた。商品——貨幣關係の發達は土地の國有を法的

虚構に轉化せしめ、大土地所有の背後に一切の私有權を確立した。

かるるが故に現代中國に於てもなほ大なる役割を演じつゝある、中國封建制度の最大の特特殊性として認められなければならぬものは、過去に於ける中國の地主經營の最も獨特な事情、即ち中國に於ては義務耕作經營が確立されなかつた、と云ふことである。この原因の一つをなすものは、中國の土地が自然的災害（洪水と旱魃）を蒙むり、義務耕作經營に對する小規模小作經營若しくは『國家的』農民經濟に對するより以上の好條件を與へないからである。同時に灌漑農業と過少農經營は農民搾取の義務耕作形態と調和することが少く、其等は中國に於て中國的農奴制『小作』の獨特の形態の確立を助けたのである。

粗笨な定式的特徴付けに於ける過去の中國の封建制度の根本的特特殊性とは、斯様なものである。

この序論に於て我々は比較的詳細に、中國に於ける封建制度とアジア的生產方法に關する問題を扱つた。何故ならば中國の農村經濟の現代の特特殊性は、過去の中國に關する基礎的な根本的な表徴なしには理解することが出來ないからである。事實中國のマルクス主義的歴史書は現在尙ほ存在してゐない。然しながら、既に我々が處理した所の中國の根本的な知識は我々をして次のやうな事を云はしめる。即ち、中國の過去の社會制度をアジア的社會とし、現代をアジア的生產方法から、資本主義への過渡的時代として規定することは、明らかに満足なものではない。過去に支配的であつた搾取の形態は、封建的搾取であつた、そして現代の中國に於てもなほ支配し續けてゐるものは、『アジア的生產方

法の外殼と殘存物』ではなくて、封建制度の殘滓である。この封建制度の殘滓こそが我々をして中國の農村に存在する諸關係を、半封建的諸關係として規定せしめるものである。

この關係に於てレーニンの次のやうな言葉は今もなほ其の力と意義を持つてゐる。

『後れた農業的半封建國としての中國の客觀的諸條件は特に、五億の人民の生活に抑壓と搾取をもたらす歴史的に規定せられた只一つの獨特の形態、即ち封建制度を日程に上せてゐる。封建制度は農業的生活様式と自然經濟の支配の上に基礎づけられてゐる。中國の農民の封建的搾取の源泉となつたものは、あれやこれやの形態に於ける土地への農民の緊縛である。この搾取の政治的指標となるものは封建的領主であり、これ等凡ての建的領主の各々は、元首としての皇帝と關係を結んでゐるものである。』(傍點著者)(『ネヴァの星』一九一二年)。

我々は本序論に於ては、中國の農村經濟の根本的問題に關する分析に於て著者が犯した、他の一連の著しい理論的誤謬の穿索に耽るのを止めて、唯これらの諸缺陷の中の最も特徴的なものだけを序でに注意して置かう。即ち、著者は農民經濟の特徴付けに於て、資本主義の諸條件及び世界市場との密接な關聯に於て、中國の中に發達しつゝあるこの經營の特殊性の分析の眞の困難を回避し、自己の分析から(價值の範疇としての)『資本』の概念を追ひ拂ひ、到る所に於てそれを『財産』の通俗的な概念に依つて置き替へてゐる。これと關聯して我々は、少くとも獨特なものと呼ばなければならぬ所の著者の表現方法を検討しなければならぬ。即ち我々は、『中國の農民は自己の財産()に對する利子を

得てゐる』、『土地の價格と建物及び樹木の價値は土地所有者の財産(！)——編輯局——の構成部分をなしてゐる』と云ふやうなことを著者から知るのである。我々は又『中國農業家の財産の有機的構成は極めて低度である。』等々の事を知る。

『中國農村經濟研究』の著者の分析の他の理論的に薄弱な點をなしてゐるものは、中國に於ける所謂『用水關係』に關する彼の偏見である。中國に於ける現代の農村經濟の特殊性を特徴づけ乍ら、著者は中國に於ける人工灌漑に關する問題と關聯して次のやうな斷定をなしてゐる。『アジヤには土地權利關係はないが、土地——用水の權利關係は存在してゐる。』(傍點著者)

この斷定を著者は中國へも亦全部應用してゐる。土地——用水權利關係に關する特別の章に於て、著者は、この定義を發展せしめ、『用水權利關係』若くは『土地——用水權利關係』に關する問題を、『土地權利關係』の問題から區別せられる特別の特殊的問題として掲げてゐる。土地と用水のこの對立の中に於て、著者は社會諸關係を拜物視してゐるのである。これは丁度一つの餘剩生産物の二つの部分への分割を象徴的に反映しつゝある土地の地上と地下、二つの層の所有の問題に於て、著者に依つて行はれた社會諸關係の拜物視と同様なものである。

『用水權利諸關係』に特特的な性質を與へることによつて、著者はこれと關聯して東洋に於ける人工灌漑の役割に關するマルクスとエンゲルスの説を又不正確に説明してゐる。『用水權利諸關係は——と著者は述べてゐる——絶えず土地權利關係と結び付いてゐる。これ故に(——編輯局)マルクスと

エンゲルスは、東洋土地諸關係の理解に對する鍵として、特にこの要因を強調した。』此處で著者は、東洋の土地諸關係に於ける人工灌漑の役割に對するマルクスとエンゲルスの見解の眞實の意味を全く歪曲してゐる。

中國に於ける農村經濟の様々な問題の分析の中に存在する、著者の箇々の理論的誤謬を提出すると共に、上述の諸缺陷があるにも拘らず、『中國農村經濟研究』は、其中に包含された實際的資料の極めて豊富なることに依つて、優れたものであり、且つ中國に關する現代の文獻への極めて價值ある寄與をなしてゐる、と云ふ事を繰り返さなければならぬ。

中國問題研究所

一九二八年七月六日、モスクワ

邦譯版について

本書の原著者及びコム・アカデミー所屬「中國問題研究所」の序文によつて、本書が如何なる意義を持つかは明らかであらう。ただ、譯者たちとして一點だけを附言するならば、我々は、本書の譯出を中國問題研究上の重要な基礎事業と考へたばかりでなく、本書の分析が、直接、日本農業研究に資するところの多いことを期待してゐると云ふことである。日本農業の特質を研究するに當つては、その特殊な植民地型に注意しなければならぬと云ふことの具體的な意味が、本書の批判的研究によつて充分に把握され得るものと考へる。

譯出に當つては、一九二八年版のロシア語の原書と一九三〇年版の支那語譯とを併用し、参照した。そのうち、特に、序論、第一—二章、第八—九章は、わが研究所所屬ソヴェート同盟研究會の小出民聲君がロシア文より、他は我が研究會の杉田重夫君が支那文より譯出した。勿論、どの部分も二つの原文が對照されてはゐるが、我が研究會のロシア語力の不足のため、尙不備の點が多いことと思ふ。下卷の譯文については、現在特に精密を期して努力してゐるのではあるが、この卷の缺點については讀者諸兄が忌憚なき忠告を我が研究會にまで寄せられことを切に願ひしたい。

一九三二、一〇、七

プロレタリア科學研究所

中國問題研究會

序論 アジヤ的生産方法と帝國主義

この著書の不十分なことを我々は充分に知つてゐる。この著書のなかで、いくたの問題は、たゞ問題が提起されただけにすぎなく、決して解決されてはゐないと云ふことを我々は充分意識してゐる。この缺點は一部は主觀的な原因によつて、一部は客觀的な原因に依つて説明される。全中國の規模に於ける多少とも信用するに足る且つ確かな統計のないと云ふことは單にこれらの原因の一つに過ぎない。土地所有の各形態と借地關係の比重が種々の地方に於てたへずかはつてゐると云ふことに關聯して起る困難について云はないまでも、土地財産と土地所有の各種の形態に關する問題、また借地關係の形態に關する問題の研究は進んでゐない。我々は幾多の地方に於いて信するに足る材料を持たない。中國及び外國の材料はこの方面に殆んど役にたたない。なぜなら、多くの場合それらはむしろ問題を混亂させるには役立つが、説明には役立つから。大多數の場合、それらは、中國の特殊性を考慮しないで、ヨーロッパ或ひはアメリカの状態にのみ適合する方法を盲目的に用ひてゐるのだ。我々は外國及び中國の研究家の材料及び觀察を集めることに努めた外、中國に於ける最近の諸事件の目撃者であつた中國の農民組合やロシアの同志達の聚会的經驗及び觀察をも利用することに努めた。中國に於ける革命運動はあらゆる地域を同じ程度に捲込んだわけではなく、あらゆる地域について同様の明確さを以て農業Ⅱ農民問題を説明したわけでもなかつた。

我々の經驗と觀察とは、ただほんの中國の個々の地に及んでゐるにすぎない。雲南、貴州、新疆、廣西等の状態に至つては我々はまだ分析を加へてゐない。そして、沙漠的灌概農業が主流を占め、マホメツト教の影響が社會關係に深い痕跡をあたへてゐる。新疆省は全く、我々の研究範圍の外に出てゐる。疑ひもなく中國農業問題研究の經驗から得た少からず重要な結果の一つは、地域別にこの國を研究することが必要だと云ふ理解が強められたことである。

困難の第二の部類は理論的歴史的性質を帶るものである。『その諸關係を表現する諸範疇は、その編制の理解は、同時に該社會をして滅亡した過去の社會形態すべての編制と生産諸關係とを洞察し得しめる。ブルジョア社會はこれらの社會形態の破砕片と諸元素との上に築かれ、その一部は尙ほ克服されぬ殘物として前者の中に餘命をつなぎ、一部は單なる暗示だつたものが完成した意義にまで發展して來てゐる、等等。人體の構造を知ることば猿のそれを知る鍵である』。(註一)然るに同時に猿の解剖は人間の解剖への鍵である。現在の中國は昔の中國から發展して來たのである。尤もそれは有機的進化的にではなく、甚しい革命的な跳躍と變革とを以てせるものであつた。古代中國の社會形態の構造に關する問題、及び既に我々の面前に解體された殘片に關する問題は同じく無視することが出來ない。これは農業問題が國內の全經濟から切離せないと云ふ事情に依つて益々さうなつてくる。中國の農村は既にづつと以前から自給自足的生活をしてはゐない。それは都會と、商業と、手工業と、家内工業と、工場と、世界市場とに結合してゐる。農業問題を理解するにはあらゆる社會階級を、それらの相互關係と相互作用とを、それらの鬭争を明かに

する必要がある。かうした必要は我々をして、國家が過去に於て如何なるものであつたか、如何に變化してきたかと云ふ問題に導いてゆく。さらに中國は既に世界的商品交換のなかに織り込まれてゐる。それに依つて帝國主義及び帝國主義のこの國の經濟への影響に關する問題が極めて重要になつてくる。マルクス主義思想の偉大な工匠たちは、我々をして、帝國主義の問題——帝國主義が植民地にあたへる影響——について、全體的な學說をあたへてゐる。そして、帝國主義が、殖民地及び半殖民地諸國の經濟及び社會關係にあたへる影響の問題については、具體的な研究と云ふ意味に於ても、理論的に一般化すると云ふ意味に於ても一段の骨折が必要である。資本がこれらおくれた諸國の生産關係を如何にして自分に切り従へるか、舊關係が如何にしても崩壊し、新關係が如何にしておこるか、帝國主義・プロレタリア革命及び國民解放戰爭の時代に於てこれらの過程が如何に行はれて行くか、と云ふ問題がこれに關連してゐる。

註一 カ・マルクス、經濟學批判序説、二六頁、邦譯マルクス、エンゲルス全集七卷、四〇五

これらの複雑極まる問題に解答する試みは我々をあまりに遠く主題からそらせることになるであらう、我々はこゝで、問題の範圍内の若干のものに限つて、短い説明を加へるに止めるであらう。

帝國主義が中國において遭遇したのは、如何なる社會、如何なる生産方法であつたか？ この社會に對する帝國主義の影響は如何であつたか？

マルクスは四つの生産方法を區別してゐる。

『ブルジョア經濟は、ブルジョア社會の自己批判が始まつた時に始めて、封建的、古代的、東洋的社會を

理解するに至つた。』

『大づかみには、アジア的、古代的、封建的、及び近代ブルジョア的の生産方法が、經濟的社會構成の前進的諸紀元として區別される』。(註二)

註二 『經濟學批判』二九及三九、邦譯同書、四〇六及四一六

マルクスは、帝國主義の侵入前の中國にはアジア的生産方法が存在してゐた、東洋社會の特徴をなす諸關係が支配してゐた、と考へてゐたのであらうか？ 或ひは、マルクスは古代アジア社會を、ヴァヴィロン

アッシリヤ、ペルシヤ等に存在してゐた秩序として考へてゐたと考ふべきであらうか？ 我々の見るところでは、マルクスがインドにこの制度が存在して居り、英國の占領が正にインドに於けるこの生産方法を瓦解させ、克服したと考へてゐた事は疑ひのない事實である。マルクスが、列強の殖民地の政策が中國においてもこのアジア的生産の經濟的基礎を破壊したと考へてゐた事も疑ひのない事實である。レーニンやプレハノフの様な偉大なマルクス主義的思想家等がアジア的生産方法の存在を認めただけではなく、我々が以下に示す様に、そのマルクス主義的教義を發展させたこととも疑ひのない事實である。問題になるのはマルクス及びエンゲルスが東方社會と云ふ言葉の下に、アジア的生産方法と云ふ言葉の下に理解してゐた點如何である。

この問題に答えるには、各種の前資本主義的生産方法の類似點及び特徴を明かにしなければならぬ。共通點は次の様な點である。

『定着的農耕を営む諸民族に於ては——此の定着が既に一大進歩なのだ——古代及び封建社會に於ての如くに定着的農耕が、優越してゐるところでは、工業や、其の組織や、工業關係の所有形態さへもが、多かれ少かれ土地所有的な特質を持つて居り、『社會』は全く農業に依存すること古代ローマの如くであるか、若しくは中世に於けるが様に、田園の諸組織をば都市に於て、都市的關係において模造してゐる。中世においては資本そのものが——純粹な貨幣資本でない限り——傳統的な手工道具(?)その他として此の土地所有的な性質を帯びてゐた』。(註三)

註三 『經濟學批判』二九—三〇、邦譯前掲書、四〇六—四〇七、

また、封建時代の都市の資本に關聯して、づつと前に次の様にしるしてゐる。

「これらの都市の資本は自然に蓄積された、特別な身分制的資本であつた。……この資本は現代の資本の様に、如何なる物からなりたつてゐるかには無頓着に貨幣で計算される様な事はなかつた。それは所有者の一定の労働と直接結びついた、それとは切り離し得ない、且つその限りに於て身分制的資本であつた」。これはアジア的社會の資本の特徴描寫にも全くあてはまる。これらの社會に於ても全じく、「各生産部門に据えられた生産機關は容易にこれを一つの部面から他の部面に移轉せしめる事が出來ず、これがため各異つた生産部面がある程度まで相異つた國と國又は相異つた共產體と共產體との間に於ける如き相互關係に置かれる」。(註四)

註四 マルクス——「資本論」第三卷、第一分冊、一五六頁、邦譯新潮社版二〇五頁。

各種の前資本主義的生産方法は次の點で似てゐる。「古代アジア、古代ギリシヤ及びローマ等に於ける生産方法の下にあつては生産物が商品に轉化されること、随つて又人類が商品生産者として存在すること、從屬的の役割を演ずるに過ぎない。尤も此の役割は、當時の共同體が消滅に近づくほど、益々重要なものになつた。」註五）從つてアジア的生産方法はいさゝかも商業を排除しない。中世紀に於てインドは全部一諸にしたヨーロッパの多くの國々よりも發達した商業を持つてゐた。支那の商業はインドの商業よりも一層發達してゐた。共同體の瓦解と云ふ意味に於て支那はインドよりも百年も進んでゐた。それに應じて支那の商業はより高い發展を示して居り、この發展はまた共同體の瓦解を強め且つ速めてゐた。インドや支那に於ける様に古代アジア的專政制の下に於ては、我々はその各歴史時代に貨幣、銀行、手工業等を發見する。併し、貨幣はそれ自身では如何に大きな役割と權力とを持つてゐる時でも全經濟生活に於ては從屬的役割を演じてゐたにすぎない。貨幣は資本主義が生んだものではない。それは唯貨幣を發達させただけである。使用價值から交換價值を生んだのは資本主義ではない。それは唯商品生産をば一般的範疇に發展させただけである。資本主義は餘剩労働を「發明」したのではない。アジア的、古代的及び封建的生産方法は分業、交換、商業、手工業、餘剩労働を既に知つてゐた。

註五 「資本論」第一卷、四八頁、那譯六五―六六、

前資本主義的生産方法は斯様に、商品を知つてゐたが併し生産物は一般に商品の性質を帯びなかつた。貨幣について知つてゐた、併し貨幣關係は從屬的役割を演じたにすぎなかつた。賃銀労働をさへ知つてゐた

が併し賃銀労働は例外であり、過渡的な形態として存在した補助的な労働にすぎなかつた。前資本主義的社會は市場關係を知つてゐた。併し市場でさばかれるのは、自分自身の生産に依つて満足を得てゐる直接的生産者が、需要を充した残りの過剰物にすぎなかつた。生産物の大部分は生産者自らの消費の満足のために生産せられた。貨幣及び商品が恰もそれ自身、資本でない様に、生産手段及び消耗品は資本でない。それは資本に轉化されねばならない。かゝる轉化の前提は一方に於ける貨幣及び生活手段の所有者、他方に於ける「自由な」労働者の存在である。後期のローマにはこれらの前提が存在してゐたが資本主義的方法は發展しなかつた。その理由は幾多の歴史的其他の原因に依つてこれら二前提が結びつかなかつた爲である。支那の歴史に於ても一方には貨幣及び生活手段の蓄積、他方には生産者（農民）及び手工業者の生産手段からの解放が甚だ屢々見られる。商業高利貸資本がこの分離を促進したのである。併し自分の生産手段から解放された生産者は生産過程に加はらない放浪者となつて行つた。東洋社會に於て常に發生する莫大な數の農民の生産手段からの游離は、未だプロレタリアに轉化しない莫大な數の放浪者を作り、この社會の週期的危機の先ぶれをなしたと言ふことが出来る。

舊い生産方法は國內的商業を全然除外しないばかりでなく、國外貿易をも除外しない。ローマは大なる對外貿易をいとなんでゐた、古代インド當時知られてゐた全世界と貿易をいとなんでゐた。支那もその歴史過程に於て屢々前資本主義時代の商業民族中に於ての第一級の位置を占めた。併し社會内の分業も各る間に於ける分業も、自然發生的性質を帯びてゐた。發達した近代的意味に於ての世界市場は尙存在して國

なかつた。

各前資本主義的生産方法は次の點でも似てゐる。即ち、アジア的、古代的及び封建的生産方法に於ては資本は主として高利貸資本及び商人資本として活動する。正にこれらの資本形態こそ前資本主義的生産方法の特徴である。

「資本制生産前期に於ける高利貸付資本の特徴的形態には二つの種類がある。……謂ふ所の二種の形態とは第一に豪奢なる上流者（本質的には土地所有者たる人々）に對する高利貸付、第二に自己の勞働條件の所有者たる小生産者への高利貸付これである。この第二の小生産者と云ふなかには手工業者も含まれてゐるが、その最も特徴的なものは農民である」。(註六)

註六 マルクス、「資本論」第三、第二部、一二四頁、邦譯、一九一、

高利貸資本は債權者として國家を搾取することも出来れば、國家收入の請負人としてそれを行ふ事も出来る。インド及び支那、中世のヨーロッパに於ける様に古代ギリシヤ及びローマ史にも、高利貸資本の暗黒な功績に關する記事が載つてゐる。

商人資本も全じくこれら凡ての生産方法に共通した現象である。その生産方法に對する關係は外面的である。それはあらゆる生産方法——アジア的だらうが、古代的だらうが、封建的或ひは資本主義的だらうが、それには論なく——に於て、且つあらゆる生産方法の間に於て商品交換の仲介者たる役を勤める。併しあらゆる場合に於て、商人の財産は貨幣財産として存在し、商人の貨幣は貨幣として機能を營む、商

業高利貸的搾取形態の優越は資本主義的生産方法を排除する。

商業と手工業との外部的組織的形態も全しく各種の生産方法の共通點である。ギルドはインドにも、日本にも、イギリスにも、アラヴィヤ、支那にも存在した。ヨーロッパのギルドがづつと後の時代に至つてなした様に東洋のギルドはその成員數を制限しなかつた、と云ふ事情は何等本質的な特徴ではない。

あらゆる前資本主義的生産方法は次の點でも類似點を持つてゐる。即ち、農業と手工業との結合がこの生産方法の主要な基礎の一つである。農民の糸車と手織機とはその主要な基礎であり、それは農業と結びついて農村の消費を充してゐた。織物業の専門的手工業への分離はこの前資本主義的關係の基礎を破壊し得なかつた。これをなしたのは唯蒸氣機關のみである。道路のないことが個々の村々の個立化の條件となり、それがその個立化を甚しくしてゐた。市場は一般に、殆んど相互間に結びつきを持たない地方的市場の性質を帯びてゐた。前資本主義時代の海上及び河川に依る交通は各地方及び各國々の孤立化を緩和はしたが克服はしなかつた。歴史的な貿易路の存在もこの有様を根本的に變えることはなかつた。一方に於て海上及び海川用の汽船が、他方に於て鐵道が始めて東方社會に於ける近代的工業の先行者たり得た。それは丁度これらの汽船や鐵道が西洋に於ける資本主義的生産方法の發達と近代的工業の創設に力強い刺激をあたえたのと全様である。

共同體——血縁的、農村的及び宗教的の——存在さえもが生産方法の性質の問題を決する事にはならぬ共同體は古代的、アジア的及び封建的制度の下に於て實に各種各様の形態を以て存在し得るし、また實際

存在してゐる。そして今では、血縁的共同體があらゆる前資本主義的生産方法の出發點をなした、と云ふことは疑ひのない事實になつてゐる。

若し歴史的發展を調べ、あらゆる命題を最も簡單な式に還元して見るならば、古代社會は一般に、血縁制の瓦解から發展した、と云ふ事が明かにならう。古代社會の特徴は奴隸制度である。「然るに奴隸制度は一つの生産關係で、これは性及び年齢に照應する分裂しか知らなかつた社會に、階級分裂の始つた事を示す。奴隸制度が充分發達すると、それは社會の全經濟の上に、及びそれを通じて他のあらゆる社會關係殊にその國の政治的秩序の上にその刻印を押す。古代國家はその政治的組織に於て如何に相異して居ようと、それには共通の特徴が一つある、——それらの國家はいづれも、自由民の利益のみを表現し且つ擁護するところの政治組織であつた」。(註七)

註七　ゲ、ヴェ、プレハノフ、「マルクス主義の根本問題」『モスコイ労働者』版、四二頁。

支那及びアジア的社會の歴史は一般に奴隸制を持つてゐる。且つ各種の形態を持つ現在でさえも奴隸制を持つてゐる。併し發達した東方社會に於ては奴隸制も從屬的範疇にすぎない。

東方社會發達の起源は全しく氏族制度、即ち、血縁的、宗教的、或ひは農村的共同體である。然し次の補足がある。「東洋では人工的な灌漑と云ふことが農村の第一條件である。そしてこの灌漑の意識的な統制は共同體か或ひは、地方政府、或ひは中央政府の問題である」。(註八)プレハノフもこの點に東方社會の根本的特徴を認めてゐる。我々の見るところではプレハノフが、新しい歴史上の調査によつてマルクスの次

の主張、即ち、東方的、古代的封建的、及びブルジョア的生産方法は社會の經濟的發達の順次的な（進化的な）各時代であると云ふ主張に修正が持ち込まれることになつたと指摘してゐるのは全く正しい。生物學に於ける細胞の發見の様な役割を社會科學に於て演じた血縁的諸組織の發見は、生産方法一般に關するマルクスの理論に修正をあたえたのではなく、それらの順次性に關する主張に修正をあたえたにすぎない。次に掲げるのがプレハノフの主張である。

註八 一八五三年七日六日付エンゲルスのマルクスに宛てた手紙、邦譯では六月六日付になつてゐる。

「だが、その後原始的社會に關するモルガンの著書を知るに及んでマルクスは古代的生産方法と、アジア的生産方法との間に存する關係についての見解を變更したと思はれる。實に封建的生産方法の經濟的發達の論理は資本主義の勝利と稱しうる社會的革命を導いたのである。だが經濟的發達の論理は、例へば支那或ひひはエジプトにおけるそれは、決して生産の古代的形態を導入しなかつた。第一の場合に於ては、相繼いで起り、且つ前者が後者によつて發生せしめられるところの二つの發展段階が問題になるが、これに反し第二の場合においては、經濟的發達の二個の形態が並存して居る。古代的社會は氏族による社會組織に繼いで表はれ、後者はまたアジア的社會秩序に先行した。これらの經濟的組織の二つの型の何れも氏族の上に建てられた社會的組織の内部に於て活動し、且つ最後にはこの組織を解體せしめたところの、生産力増大の結果として發生したのである。これら二つの型が相互に著しく異るとすれば、それは兩者の主たる區別標徴が地理的環境の影響の下に形成されたからである。一つの場合に於ては、地理的環境は生産力發展

の一定の段階にある社會にこれこれの生産關係の總體をあたへ、他の場合には第一のとは異つた生産關係の總體をあたへたのである」。(註九)

註九 プレハノフ「マルクス主義の根本問題」五四—五五、邦譯五九—六〇

壓倒的範疇としての土地に對する私有が東洋に於ては西歐よりもより後の發達の結果であり、古代的、封建的、或ひは現代のブルジョア的所有とも全然異なる形態を以て現はれたのは地理的環境の影響に依つて説明せられる。壓倒的範疇とその土地に對する私有の、封建的及び近代ブルジョア的概念はヨーロッパからアジアに輸入されたものである。

「財産の最初の形態は種族財産である。……第二の形態は、古代に於ける公共自治體の財産及び國家財産である。……このときには既に、公共自治體財産と相竝んで、動産の私有及び後には不動産の私有も亦發展する、併しそれは例外的な、公共自治體に對して從屬的な形態としてである。……私有財産の發展と共に、此處に初めて、近代の私有財産に於いて——只一層擴大されたる規模に於てであるのが違ふだけであるが——再び見出すであらう所と同一の諸關係が出現する。……第三の形態は封建的若しくは身分的財産である」。(註一〇)

註十 マルクス、エンゲルスの『フオイエルパツハ論』——マルクス、エンゲルスアルヒーフ三〇三—三〇五邦譯、

『ドイチェ、イデオロギー』一四六—一四七。

第四の形態として近代的私有財産がたちあらはれる。

東方社會に於ては土地私有は封建的所有に至つても發達しなかつた。マルクスは「此處に東洋を理解する鍵」を見出してゐる。

「土地所有者が共同體であり、國家である様な、すべての東洋諸國に於ては、「私有財産所有者」と云ふ土語さへ存在してゐない。然るにそれについて、デューリング氏は、インドに於て、「何人が此處では土地所有者か」といふ問題について無益にも心を痛めた英國法律家と語るのである。それは「誰れがこゝの市長か」と云つたヘンリツヒ十二世の光榮ある記憶に似てゐる。」(註十一)

註十一 エンゲルス、「アンチ・デューリング」九四頁。

近東に於てはトルコの占領が始めて封建制に似たものをつくりあげた。そして純粹な封建的秩序が發達したのは日本のみである。特別な歴史的條件のために、その際、日本の領主等の大いさは農奴の數に依つては計られず、地代の量に依つてはかられてゐる。インドに於ては英人の占領までに各種の基礎の上にたつ地代の收得者の層がつけられてゐた。然しインドに於て半封建的、半ブルジョア的意味に於ての私有財産をつくつたのは英人である。それは丁度、インドネシヤに於てオランダ人が、アルジェリーに於てフランスがかゝるものをつくつたのと全じである。

我々の見るところに依れば、この點に一つの重要なモメントがあるのである。その説明は支那史の理解のため必要である。其處では人工灌漑が全しく土着農業の第一條件となつてゐる。然し人工灌漑は全しくまた田野の地均し、排水システム、及び灌漑の基本的源泉である河川の氾らん防止のための莫大的な設備

を豫想する。これらのすべては個人的な農民經濟ではやつて行かれない任務である。交換の上にかかる血縁的共同体の瓦解、遊牧民との鬭争は、建築的治水的「官僚」を社會的機能の擔當者たることから以前の社會の公僕たる事から、社會の支配層の一つにしてしまふ。この見地からすると、紀元前三世紀の支那に存してゐた侯國が、候地を領する侯國に似てゐたか或ひは古代ギリシヤ型の氏族國家に似てゐたかと云ふ争論は單に歴史的興味を持つにすぎない。支那に於ける發達の出發點がこの東方社會であつた、と云ふことが重要である。我々は以下に於て、商業高利貸資本が帝國主義の侵入する以前にこの生活秩序を掘り崩し、東方社會、アジア的生産方法を瓦解させたのを見るであらう。帝國主義の國內へ侵入、國內に於ける資本主義の發展はこの過程を速めた。然しこの秩序の碎片と殘物とは尙この國をおほつてゐる。それは尙依然としてこの國の生活を腐らせ且つ毒してゐる。それは丁度、自分の側から、支那の舊來の東方社會とその主要な基礎、即ち土地私有缺除とを瓦解させた商人及び高利貸資本が生産關係、即ち財産關係を瓦解させた様に。この點に於て商人及び商業資本は革命化して生産方法に影響をあたえた。然しその作用は土地に對する近代的ブルジョアの私有をつくりあげるには力が不充分でつた。この方面への發達をよびおこすためには帝國主義の侵入と支那自身に於ける資本主義的生産方法の發達が必要であつた。

勿論、完全な封建主義が存在した事のない様は東方社會も亦「純粹な形」で存在した事はなかつた、若しロシア、ドイツ及び英國型の封建主義を區別することができるとすれば、また若し各國々に於て封建主義が、いくたの自然的及び歴史的な原因、戰爭、移住等に應じて各種の變更、各種の變化を受けて存在したの

だとすれば、アジア的生産方法もまた近東（此處ではオアシスⅡ灌溉農業、及び農業及び牧畜業者の不斷の結合がそれに特別な性質をあたえてゐる）。インド（此處ではいくたの歴史的原因によつてカスト（一種の階級）ができてゐる）。支那等において各種の變化を受けて存在してゐる。支那では歴史的發展の具體的過程に依つてこのアジア的生産方法は特別な刻印をあたえられてゐる。

アジア的生産方法はその純粹な形に於て存在した事がないばかりでなく、一定の歴史的社會的條件のもとに於ては、農業生産状態が東洋特有の諸前提とも異なる場所に於て發生し得たし、また行はれ得た。然しあらゆる各状態を通じてその基礎に横るものは土地の國有である。レーニンはこの點にこの生産方法の特徴を見た。ロシア社會民主労働黨の統一大會に於てブレハノフと論争しつゝ、レーニンは土地國有について、特に次の様に云つてゐる。

「モスコイ公國のロシアに土地國有が存在したと云ふ限りでは（換言すればモスコイ公國のロシアに土地國有が存在したとすれば）、その經濟的基礎はアジア的生産方法である。併しロシアに於ては十九世紀の後半以來、資本主義的生産方法が強められ、二十世紀には既に無條件的にそれが優勢になつてゐた。（傍點—レーニン）。ブレハノフの論證からは何が残るか？ 彼はアジア的生産方法に基く國有化と、資本主義的生産方法に基く國有化とを混同したのである。言葉の同一な事から、彼は經濟的、即ち生産的諸關係の根本的差異を閑過した」（註十二）

註十二 レーニン「全集」第四卷、四一〇頁。

それ故我々が東洋に於ける土地の國有化を云々する時には、我々は東洋社會を基礎とする國有化を考慮に入れる必要がある。

スペイン人はスペインに於てムーア人のつくつた巨大な灌漑設備を破壊した。併しスペイン人の勝利後につくられた具體的な歴史的、社會的諸關係は、マルクスの意見に依れば、ヨーロッパ的封建制よりもむしろアジア的專政制度の社會に似てゐた。ロシアに於ては外的影響及び内部的發展に依つてペートル以前の時代に於て、「アジア的秩序」の形成が行はれてゐた。東洋自身に於てアジア的生産方於是純粹な形で存在しなかつたばかりでなく、最も多様な變化、變更を受けて現象してゐた。

あらゆる東洋社會に於て共通な事は、アジア的生産方法に適應する國家形態が東洋的、アジア的專政制度である、と云ふ事である。全東洋專政制度の共通的特徴を擧げれば次の通りである。

(一) 社會的な仕事は中央政府の仕事である。

(二) これと共に數個の大都市を考慮しないと、全國土は農村共同體に分れてゐて、各農村共同體は全く秘密な組織を持ち、自分自身の小世界をつくつてゐる。(註十三)

註十三 マルクス、エンゲルス宛、一八五三年六月一四日付の手紙。

マルクスはアジア的專政を斯様に特徴づけてゐる。エンゲルスは屢々この問題にたちかへり、且つ屢々この特徴——社會的な仕事一般の組織及び特に人口的灌漑と結びつひたこの仕事の組織——こそがアジア的專政の基本的特徴である、と強調してゐる。

東洋に於ては、特に極東に於ては東洋的専制は社會的活動の組織であるばかりでなく、同時に、自然發生的災害の結果に對する全社會の社會的保證の組織者でもある。我々は東洋社會の一大特徴である倉米制度の組織を云ふのである。

東洋的専制政府は、市民的自治體が専制政府の直接的利益に對して反對行動をとらざる限り、反對する様な事はしない。然も、反對に、これら自治體が専制政府から何かの仕事の義務を軽減する限り、専制政府に對して、管理的取締りの繁雜を節約させる限り、よろこんで、斯様な制度の存在を許す傾向がある。(註十四)

註十四 『マルクス及びエンゲルスの文學的遺産から』四一七頁。

同じ事は農村、血縁制的共同體の生活についても云へる。傳統と習慣——珍奇な傳統と習慣——がこれらの共同體の内部生活を取締つてゐる。そしてこれらの共同體が専制政府の利益に反對行動をとらざる限り、それらが餘剰生産物を提供する限り、専制政府はそれらの事柄には干涉しない。市場の擴大が農民に對する壓迫を強めた時に、傳統的な搾取の障壁と境域とが破られた時に、その時農民は反亂する。この事は、あるものが論駁する様に東洋的専制には階級は存在しない、と云ふことを意味するだらうか？ 問題の提起そのものが答へを藏してゐる。血縁體をのぞけばあらゆる社會秩序は自分自身の、それ特有の階級を持つてゐる、のではないか？ そしてまた古代社會に近代的資本を求めたモムゼンをマルクスが笑ひ、またマルクスが、封建時代の都市ブルジョアジーと資本主義時代のブルジョアジーとの混交を警め、封建

社會のブルジョア身分と、資本主義生産方法のブルジョアジーとの間の歴史的取上げ方を強調し、且つまたエンゲルスが、中世紀の前プロレタリアートと資本主義時代のプロレタリアートとの混交を警めてゐることに想記するならば、東洋社會に、この社會に特有な階級を求めるとは全く正しいであらう。マホメット教的東洋社會は軍事的及び宗教的官僚・商人及び高利貸を支配階級として持つてゐる。トルコに於ては特別な歴史的條件の下にヨーロッパ的領主に似た人物が出来た。インドに於てはイギリス人は「地代の收得者」の事を語つてゐる。支那に於ては帝國主義は支配階級としての、地主、商人、高利貸、官吏の合成物に出遇つた。資本主義的生産方法の發展につれて、これらの階級は、次第にブルジョア社會の階級に轉化し、同時に新階級——近代的プロレタリアートが生れてくる。それに依つて他の諸階級及び全社會の社會的風貌が變つてくる。

これらの東洋社會に於ては自然形態をとつた地代（生産物地代）は國稅の主要要素である。そして正にこの支拂形態こそこの秩序に對して、強固化する様な作用を及ぼす。如何にそれが行はれるにせよ、貨幣徵稅への轉向はこの秩序の終局の始まりを意味する。丁度共同體的生活秩序に於ける交換價值の過度の根ざしの様に、また農業の農民的家内工業からの分離の様に。

支那に於ては凡てこれらの過程は既に世界市場、資本主義、殖民政策の發展期に起つてゐる。併し最後の段階は帝國主義時代に於てである。帝國主義が支那の經濟生活に如何に影響するかを、我々は農民經濟に關聯させて具體的に説明する様に努めよう。勿論、我々の圖形は完全ではない。農村經濟を國內の經濟生

活の全體系から切離してはならぬ。農村經濟は國內の經濟生活の構成部分である。帝國主義は國內の全經濟生活に影響をあたえるのである。

「歴史の無意識的道具」としてのインドに於ける英國の役割に關してマルクスは既に一八五三年に次の様に書いてゐる。

「英國はインドに於て果すべき二重の使命をもつてゐる。一つは破壊的の使命、二つには創造的の使命である。一面、舊來の亞細亞的社會秩序の破壊、他面アジアに於ける西歐の社會秩序の物質的前提の創設である。」
(註十五)

註十五 同上、三一八頁。

歴史の盲目の要具としてイギリスはインドに於てアジアが經驗した唯一の社會革命を起した。同じ様な社會革命を帝國主義は支那に於て喚び起してゐる。

「完全な孤立と云ふことが舊支那保存の主要條件であつた。この孤立が英國に依つて強制的に終らしめられて以來、瓦解が、丁度深い石で疊みこまれた墓の奥度に秘められたミイラが外氣を受けるや否や腐り出す様に、必然的に始つてきた。」(註十六)

註十六 同上、三九八頁。

瓦解が始つた。舊支那は一八五八年に執拗な抵抗を示した。マルクスは支那市場の急速な發展の豫想が挫折したことを誌してゐる。「この市場不成功の主要な原因はアヘンの賣買——支那に於ける輸出の全成

長はそれにかゝつてゐる——とさらに、國內の經濟組織、その侏儒的な農業——その破壊には莫大な力があるであらう——である。」(註十七)

註十七 『マルクス、エンゲルス往復書簡集』、二九二頁。

スエズ運河と大洋を航する汽船とは支那を大なる資本主義的生産中心諸國に近づけた。一八九四年にエンゲルスはソルゲに宛てゝ次の様に書いてゐる。

「戦争は舊支那に致命傷を負はせた。孤立は不可能になり、たとえ軍事的防衛上からにもせよ、鐵道、蒸汽機關、電氣及び大産業の導入は不可避免的に必要となつた。それに依つて家族のものが自分自身のためにあらゆる品物をつくる様な小さな農民生活の舊い經濟制度は没落した。またそれに依つて舊社會制度全體も没落した。」(註十八) 註十八 同上、四一六頁。

資本主義は支那を占領し出した。併し資本主義的生産方法は、直接的生産者が尙事實上或ひは法制上生産手段から分離せしめられてゐない様な舊生産方法から出發した。産業資本のみがその機能によつて、餘剩價值或ひは餘剩生産物の占有のみでなく、餘剩價值をつくり出す。それ故産業資本に依つてこそ生産の資本主義的性質が條件づけられる。産業資本の存在が資本家と賃銀労働者との階級的矛盾をつくり出すのである。支那に於ては中心諸國の産業資本は始め商品商業、或ひは貨幣商業に資本として活動した。併しそれが生産資本としての機能を發揮したのは英國、北米合衆國、日本及びインドでさえもあつた。それは支那の手工業者及び農民を零落させた。併しそれらをプロレタリアにすることはなかつた。支那の手工業

者を犠牲にして他の國々の機械生産は擴大した。それにはインドも入つてゐる。支那の農民經濟は瓦解した。併し機械産業の成長したのは他國であつた。「機械生産が手工業を犠牲として擴大する限りその成功は確實である。この第一期は莫大な利潤のために決定的意義を有する。」(註十九)支那に於てはこの第一期、決定期はより以前に資本主義的發達の道に入つた他の國々を利することになつて了つた。支那は時期におくれた。そしてこれが、その將來の發達過程を決定した。資本主義は舊生産方法を己れに従へた。併しこの過程は殖民地政策及び帝國主義に依つて決定される獨特の條件下に起つた。

註十九 マルクス「資本論」第二卷、三〇頁

やつと第二期に至つて外國資本は利子をもたらず資本として活動した。(國際借款)。併しその際、この資本の大部分は生産資本として機能せず、償金支拂(日本への償金、團匪償金)のためや、反革命支持(袁世凱に對する「改組」借款)のためや、或ひは國家機構買収(西原借款)のためにあてられた。併し商人及び商業高利貸資本として或ひは貨幣商品資本として機能した。同時に外國資本、一部の支那資本は交通(鐵道建設、河川及び大洋般行)の領域、抽出産業(石炭、鐵、アンチモニー、錫)、消費手段(紡績、絹物、煙草)の生産にふりむけられた。農村生産物に加工する若干の産業部門(食物、製油、製粉、砂糖、等)の發達が始つた。資本は既に生産資本として活動し、機能することになつた。農民家内産業は近代的資本主義産業となつた。新階級、プロレタリアートが生れた。社會の全風貌は變つた。併し生産手段の生産は尙發達しなかつた。それは一般に工業關係に於て最も發達した殖民地及び半殖民地に於てさえ特徴と

なつてゐるところである。インドに於ける金屬産業の若干の發達は一般的な姿を變える事がない。生産手段の生産には、莫大な資本の投資、資本の長い期間にわたる緊縛、熟練労働者及び技術部員たる多數の幹部の養成を要する。凡てこれらの事は高度な利潤率、より進んだ國々からの完成な機械轉送の可能性によつてはおぎなはれない。

現在、生産手段の生産は尙帝國主義的中心諸國の獨占になつてゐる。

世界戦後に於ける帝國主義諸國間の販賣市場のための鬭争の尖鋭化は、帝國主義のアジア殖民地及び半殖民地に於ける産業の一般的危機を呼び起した。世界大戦中に始まつた、殖民地及び半殖民地に於ける輕工業の急速な發達及び繁榮は終りを告げた。發展のテンポはおそくなり、處に依つては後退が起つた。

資本主義は一般に云つて農村人口を犠牲にして都市人口の相對的成長をもたらすものである。然るにインドに於ては農村人口が都市人口を犠牲にして相對的に増加しつゝある。我々は支那に於て同じ過程が起つたと云ふ事を疑はない。資本主義的生産方法の曉に於てヨーロッパに於て商業高利貸資本は封建的土地所有及び農奴的農民を解體した。封建的所有の近代的ブルジョア的所有への轉化、ツンプトの瓦解、農民の個人的從屬の廢止は大産業の廢止と同時に起つた。支那に於て新生産方法は全然獨特な、ヨーロッパのそれと異つた土地關係に出遇つた。土地所有の他の形態(旗人、氏族、共同體的等)を云々しないまでも、それは、「獨立的農民土地所有者」と竝んで、商人||地主、高利貸地主、官僚||地主及び農奴的小作人に出遇つた。ヨーロッパに於て地主||封建領主が農民を農奴化さうと骨を折つてゐた時は、支那に於てはマホ

メツト教的東洋と同様に、小作人は永久借地權を強固にしようと骨を折つてゐた。西歐に於ては土地は多かつたが勞働力が少かつた。東洋に於ては人口灌漑の必要から比較的耕地が少く、勞働力が多かつた。地主は地代に對する權利を闘ひとつた、借地人は借地部分の耕作權を、自分の生存條件に對する權利として擁護した。一言に云えば一般に小作が支那の借地關係にとつて特徴的なのではない。何故なら小作は現在北米合衆國の南部に、フランスに、イタリー及びハンガリーにも繁榮してゐる。

資本主義的生産方法の條件下に於て、小作が新しい社會經濟的内容を得るに至り得ることは自明である。小作人は資本主義的企業家たり得る。小作借地人が地代を生産物に依つておさめると云ふ事實は地代の前資本主義的形態が、資本主義的内容を陰蔽してゐるのではない、と云ふことにはならない。ネグロの小作人は地代が——それが自然物地代にせよ、貨幣地代なるにせよ——小作人の資本に對する利潤を呑み込んで了はない様になるや否や資本主義的借地人たるに至る。併し支那にとつては、甚だ少數の小作人層が資本主義的企業家になつたと云ふことが特徴的である。インド、インドネシア、朝鮮、印度支那、ペルシャ、エヂプト、アルジェル、等に於て我々は同じ現象を見る。その際、借地關係の非資本主義的内容に地代の自然物形態が昭應する。

小作は支那のいくたの地方に於て所謂、共同的土地所有を伴つてゐる。地主は地面の下層部分の所有者である。借地人は土地の肥沃な上層の所有者である。土地關係の歴史に於てこの獨特の土地所有形態を我々が見るのは唯、中世に於ける英國のケルト人住居地方と、フランスの二地方のみである。

併し、支那の借地關係の最も特徴的な姿は永代借地權である。古代社會もまた永代借地權を知つてゐた。古代ギリシヤ及び古代ローマに於ては社會及び寺院の土地は永代借地權 (emphytheusis) を以てあたえられてゐた。封建的中世紀は同じくこの借地關係の形態を古代社會から受けつゝいた。ドイツに於ては永代借地權は特に、國王、國家及び寺院の土地を貸與する場合に用ひられた。東プロシヤ、特にポーランドに於て地主は同じく自分の私有の土地を貸出した、そして借地人は、農奴制の諸要素が小作權を虐げない限り永代小作人であつた。フランスに於ては一七八九年の革命が、ドイツに於ては一八四八——四九年の革命が永代借地權に最期をあたえた。メクレンブルグ、シュトレリッツでは世界大戦中に始めて最後の永代借地人達が土地を買収した。イタリー南部スペイン、特にその西部地方では今尙永代借地制が存在してゐる。スウイツルでは「トルパール」は同じく事實上永代借地人であつて、二十世紀の始めに至つて始めて、彼等は土地を所有として買収する可能性を得た。インドに於ては英人が各地方に各種の形態の永代借地制をたてた。インドネシアに於てはオランダ人が土地使用のこの形態を固めた。東洋のマホメツト地方——アルジェール、チュニス、トルコ、ペルシヤ——及び日本のおくれた若干の地方でもこの土地使用形態は同じく大きな役割を演じてゐる。支那の土地關係に於てそれは最も大なる位置を占める。「母なる土地」でなく「資本なる土地」が、貸與される東洋に於て、永代借地制は多くの國々に於て借地關係の壓倒的形態となつてゐる。マホメツト教的東洋に於て土地所有動員の法律的形態及び土地抵當化が全く支那のそれと一致してゐるのは特徴的である。

支那にあつて特徴的なのはその獨特な、支那的、或ひはさらに正確に云へば東洋的、な永久借地形態である。資本主義的生産方法の移行に際して出遇つたものは身分制的封建的土地所有ではなくて、土地の賣買、抵當化の形態が示してゐる様な民族的所有の殘存物から尙全然淨化され切つてゐない農民的所有であつた。また中世的被物及び混合物から淨化されてゐない地主的所有であつた。近代ブルジョア的所有への移行は工業の弱少な發達のもとに於て、即ち土地を失つた農民がプロレタリアとしてつくりあげられない様な状態の下に於て、又主として商業高利貸資本の影響下に行はれた。東洋に於ける資本主義發達の最も重要な特徴の一つは資本主義が其處で優勢を占めず、商業高利貸資本を排除せず、反對に、商業高利貸資本を金融資本に従屬させつゝ、その活動分野を擴め、その把握を強めたことである。東洋に於ては資本主義は唯日本でのみ、工業及び金融資本が商業高利貸資本を己に従屬させたのみでなく、それを最もおくれた生産部門においやつて了つた様な發展段階に達したのである。

ヨーロッパに於て資本主義への移行が農民の土地所有を利用して在來の封建的領地の減少を伴つたのに対し、即ち地主を犠牲にして農民の土地所有を擴大せしめたのに對し、インド及び支那に於ては我々は反對の過程を見る。農民の土地に地主に、商人に、高利貸の手に移つた。農民財産所有者は借地人となつた。資本は土地所有に向けられた。なんとなれば帝國主義は資本の工業への投資をさまたげたから。これらの國々に於ける資本主義的生産方法への移行は農村經濟の一般的沒落の地盤の上に起つた。インドに於て王立委員會は次の様な事を指摘してゐる。人間も退化すれば家畜も退化しつゝある。灌漑設備をつくり、協

同組合などを發達させようとする英人の企てにも拘らず、植物、例へば、小麥、綿、砂糖キビ、オリイヴ類さへ退化しつゝある、と。支那に於てはこの過程は一層はつきりと起つてゐる。なぜならそこでは生産條件——灌溉制度が破壊されつゝあるから。この過程は殖民地及び半殖民地から帝國主義諸國への、相應する代償なしにの價值流出の上におこる。

市場關係の支配のもとにおける生産物地代に依る小作農業、農民の使用土地の地主財産への轉化、農民の使用土地の零小化、大機械産業未發達のもとにおける、それに伴ふ人口の都會集中なき農民の土地喪失——凡てこれらは下層農民の榮養狀態の惡化、彼等の生活水準の縮少、何千、何百萬人の人口の貧困化となつた。我々の眼の前でこの過程は、支那、インド、馬來諸島、ジャヴァ、フィリッピン、朝鮮等で起つてゐる。而して、國際修正派がマルクスの貧困化理論の構成部分を否定してゐるのに對し、アジア諸國の全發展過程は一目のもとにこの理論を確證してゐる。支那に於ては千六百萬人の人間が生産過程から抛り出された。支那に於ては尙甚だしい。全ヨーロッパに於て、資本主義的生産方法への轉化が放浪者の増大を伴つたとすれば、人口の稠密な東洋に於ては何千何百萬の人間が、放浪に、苦力に、全くの盜賊になりつゝある。この老大な人間大衆は、潜在的に、産業が發達する限りに於てのみ産業豫備軍たり得る。

世界的今業は殖民地に於ける舊耕作（インド及び支那の砂糖キビ及び藍、支那の茶）を破壊して、新しい耕作（インド及びジャヴァの茶、ジャヴァのコーヒー、インド及び支那のオリイヴ類）を發達させる商品經濟への轉化に依つて家畜及び植物の傳染病が擴まる。凡てこれらは市場自然力の強力な影響下に起

る。併しこれら諸國の生産物は獨占的商品に關せざる限り、世界市場に於て、より好都合な條件の下に生産される、即ちより高度の組織構成の資本と、生産費の少い生産物に出遇ふ。これら諸國の國內市場にはより低い生産費で生産される輸入品及び生産物が現はれる。この競争の打撃を受けて農民と職人とはその消費を生存の肉體的最小量以下に低めざるを得ない様になる。而してこの過程は東洋諸國の基本的本位貨幣——銀——が世界貨幣たるべき王座からおとされ、單なる商品になり、金に對する銀の價值がデグザグ的にではあるが減少して行く時に際して起つてゐるのである。

これと共に、帝國主義は餘剰生産物を殖民地及び半殖民地から經濟外的な強制方法を以てとり上げる。世界大戰後、經濟外の強制制度は若干破隙をつくられた（トルコ、アフガニスタン）。殖民地革命を防ぎその到來をのばすために帝國主義は改良、妥協、大小の讓歩に出でた（インド、エジプト、ペルシヤ、オランダ領インド、フィリツピン及び支那のある地方に於てさへも）。それは革命の浪の引潮に際して一層強くしぼりとるためである。併し經濟外の強制制度は依然として殘存してゐる。

支那に於てはあらゆる過程は舊國家沒落の状態下に、内亂となつた國民革命の状態下に起つてゐる。この内亂はまたプロレタリア革命及び國民解放戰の帝國主義期に於て世界的鬭争の一部たる役割を演じてゐる。「鬭争からの出口は最後に、ロシア、インド、支那等が老大な多數人口を有すると云ふ事にかゝつてくる。而して正にこの多數の人口が最近、異常な速度で自己解放の鬭争に引き込まれてきた。それ故この意味に於て、世界鬭争の終局的決定が如何であらうかについては疑ひの影すらもない。この意味に於て社會主義

の×××××は全く、且つ無條件的に保證されてゐる。」……（註二十）

註二十 レーニン「全集」第三卷、十八、二部一三七頁

支那の農民經濟を研究しなければならぬ、政治的、經濟的及び社會的外粹、その發展傾向を見なければならぬ環境は正にこの一般的特徴のなかにあるのである。

第一章 中國の統計

ソヴェートの文獻に於ては、中國の土地關係の點檢に際して、中國の農商部の統計材料から出發するものが普通になつてゐる。それは農家を土地の廣さを基礎として各グループに分けてゐる。併しレーニンは『農家の土地の廣さに關する農村統計の總括材料は證明する所が少い、内延經濟に於ける僅小な土地は外延經濟に於ける大きな土地よりも、より大規模に生産し得る、』と我々に教えてゐる。レーニンは『生産規模が農家の規模の唯一の正しい標識である。』と考へてゐた。彼は『農家の土地の廣さに關する材料だけでは生産規模を判定するに尙不充分である。土地の量による農家の分類は、大多數の場合一般に農業の發達、特に農業に於ける資本主義の發達に關する概念に極端な簡單化及び粗雜化を持ち込むものである』（レーニン全集、九卷、九一、一二一、二二二頁）と考へてゐた。我々はレーニンが、農業統計は少くとも、農家の外延的規模を示すために土地の量に關する材料を、農家の内延性を示すために不變資本（要具、機械の價值、肥料に對する出費）に關する材料を、農家の資本主義的性質を示すものとして可變資本（賃金労働者に對する支出）に關する材料を、最後に、生産規模の唯一の正しい標識として生産物の價值に關する材料を含まなければならぬ、と要求したのを知つてゐる。併し最も進んだ國々に於てさえ、官僚的愚昧さと、頑冥さとの結果、農業統計がこの要求を滿

すことは殆どない。財政上行政上の目的をのみ追ひ、且つ中國官僚の愚昧さと頑冥さとをあきる程その中に一ぱいつめこんでゐる中國の統計が、あらゆる場合に於て、そのヨーロッパ及びアメリカのお手本以上に出でないことは怪しむに足りない。若し中國のこの政府統計材料を眞面目にとれば、土地の各グループへの配分は次の様になる。

土地所有の規模	家族數	全體に對する%
一〇畝以下	一七、八〇五、一二五	三六・一
一〇——三〇	一三、二四八、二七四	二六・九
三〇——五〇	一〇、一二二、二一四	二〇・五
五〇——一〇〇	五、三四八、三一四	一〇・八
一〇〇以上	二、八三五、四六四	五・七
合計	四九、三三九、四六四	一〇〇・〇

この統計は中國の農民を三つのグループに——即ち、自分自身の土地に對して働く土地所有者、借地人、及び自分の土地を持つてゐるにも拘らず同時に自分の所有地に借地を加えてゐる半借地人に分けてゐる。農商部の材料に依れば中國の農民は一九一七年及び一九一八年に於てこの範疇に従つて次

の様に分けられる。

グループ	一九一七年		一九一八年	
	家族数	%	家族数	%
土地所有者	二四、五八七、五八五	五〇	二三、三八一、二〇〇	五三・二
借地人	一三、八二五、五四八	二八	一一、三〇七、四三二	二五・七
半借地人	一四、四九四、七二二	二二	九、三四六、八四三	二一・一
合計	四八、九〇七、八五三	一〇〇	四三、九三五、四七五	一〇〇

土地の廣さに従つて、また土地所有者、借地人及び半借地人の範疇に従つて、各家族を分類することの政府統計の材料は中國の各地方別にあげられてゐる。讀者に過大な數字の負擔を負はせぬために、自分は、イエ・イエ・ヤシノフの、内閣の材料に基いてつくつた、各省別の面積人口、家族數、耕地面積に關する合成數字をあげる。この表は中國の尺度を平方ヴォールスト（一ヴォールスト……日本の九町餘）になほしてゐると云ふ點から云つても具合がよい。（E・E・ヤシノフ、「北滿洲に於ける中國の農民經濟」一二四頁）

省及ビ各特別行政區域	面積	人口	一平方メートルノ人口	調査年次	家族數	耕地面積	一家族ノ所有スル平均耕地面積
直隸	二六三、五二三	三四、一八六、七二一	三二〇	一九二〇	四、六九一、六七一	六、三六四、一四四	一・四
山東	一二七、三六四	三〇、八〇三、二四五	二四二	一九二〇	五、四八七、一八五	六、九二〇、三五六	一・二
河南	一五四、五九五	三〇、八三二、九〇九	一九九	一九二二	六、三三一、〇〇九	二六、〇〇〇、〇〇〇	一・六
山西	一八六、二二六	一一、〇八〇、八二七	六〇	一九二二	一、五二九、五四六	三、三八一、八〇四	二・二
江蘇	八七、八八八	三三、七八六、〇六四	三八五	一九二二	四、五二五、三〇八	五、八八六、四三六	一・三
安徽	一二四、七二九	一九、八三二、六六五	一五九	一九二二	二、七四九、八二四	二、七八五、六九八	一・〇
江西	一五八、一〇八	二四、四六六、八〇〇	一五五	一九二八	四、〇六四、九五六	二、七三二、八〇二	〇・七
福建	一〇五、四〇五	一三、一五七、七九一	一二五	一九一九	一、五三一、六九五	八九一、七五〇	〇・六
浙江	八三、四四七	二二、〇四三、三〇〇	二六四	一九二八	三、三三九、五五六	七、〇七九、四八八	〇・六
湖北	二六二、四九九	二七、一六七、二四四	一六七	一九二八	三、六三六、六五四	一〇、七八五、五三四	三・〇
湖南	一八九、七三〇	二八、四三三、二七九	一五〇	一九二七	一、四三七、七九七	一、四六八、二七四	一・〇
陝西	一七一、二八五	九、四六五、五五八	五五	一九二二	一、六三七、二九五	二、一六〇、一八〇	一・三
甘肅	二八五、一七四	五、九二七、九九七	二二	一九二八	八五四、二二九	一、七九四、二七六	二・一

察哈爾	綏遠	熱河	平均	小計	黑龍江	吉林	奉天	小計	貴州	雲南	廣西	廣東	四川
—	三、一二二、〇九三	—	四四六、六六〇	八五二、二二〇	四七三、六〇八	二四一、一〇二	一三六、五〇〇	三、四八七、一五四	一五二、八三九	三三三、七七四	一七五、六七五	二二七、五〇〇	四九七、一六三
九九八、一五二	五三一、九六〇	五、三七二、九二〇	六、二七〇、七三九	二二、〇八三、四三四	二、八二五、三三七	六、四三三、三二八	一二、八二四、七七九	四二一、三五六、五六七	一一、二四、九五二	九、八三九、一八、	一二、二五八、三三五	三七、一六七、八〇一	四九、七八二、八一〇
三	—	—	一四	二六	六	二七	九四	二二八	七三	三〇	七〇	一六三	一〇〇
三	—	—	一九二八—二〇	—	一九二八	一九二〇	二九二八	—	一九二五	一九二四	一九二六	一九二七	一九二五
一二四、七六九	六六、四九五	六七一、六一五	六三二、〇七三	二、六五一、三六二	三三六、四九七	五七八、五五六	一、七三六、三〇九	五五、四七六、九五三	一九〇、六五三	一、三〇〇、二五二	二、二二六、八七三	三、九二五、二〇七	六、〇三八、三七〇
八二二、六六四	四二八、八二八	一、一二三、八九〇	四、四〇四、二八〇	八、九〇三、九六九	二、五九一、〇四〇	三、二六〇、四五三	三、〇五二、四千六	七三、七六四、二六四	九〇、〇七〇	七六六、四五八	五、五六〇、三八二	一、七三三、四六〇	八、三六二、一八二
六・六	六・三	一・七	七・〇	三・四	七・七	五・六	一・八	一・三	〇・五	〇・六	二・五	〇・四	一・四

西 藏	新 疆	蒙 古
九、七五七、二五	一、〇五四、〇五三	—
四四七、九四二、四二二	二、五〇〇、〇〇〇	二、五八〇、〇〇〇
四	二	—
—	—	一九二八
五九、四五二、三二八	—	四六〇、二四
八五、八三四、三九三	—	八〇二、七八六
一・四	—	一・七

我々は我がロシアの文獻が農商部の統計にある種の意義を認めてゐないならば、それを取りあつかふことはしなかつたであらう。例えば、同志ヴオリンさえ、その最初の研究（ヴオリン「支那に於ける農村經濟、經濟學の根本問題」雜誌、「カントン」、八號、九號、一九二六年九月九日）に於て、ある種の條件を付してゐるとは云へ、これらの材料を、方向を示すもの、近似的なものと認めてゐる。併し、同志ヴオリンもしばらく後には、彼獨特の誠實さを以て、自身、「中國の政府統計は本質上地方からの行政上警察上の報告を集めたもので、それらの地方の經濟状態につひて近似上の概念をあたえないばかりでなく、屢々曝露されるやうに、眞實を曲歪してゐる」（ヴオリン「支那に於ける農村經濟の構造」「滿洲通信」八號、一九二六年、六一頁）と指摘してゐる。

同志、ポポフ・タチヴァ、ホプロフ、アリスキー等は、月並な條件を付した上で中國の統計を用ひ、それから、農村に於ける階級的分離、及び其他に於ける資本主義の發達の諸前提に關する結論を引出

してゐる。

それらが農村統計の一要素、即ち農家の土地の廣さをでも反映してゐるかどうかを知るために、この材料をより注意してしらべて見よう。次に示すのが、この統計の若干の抜粹である。

河南省の耕地面積は、一九一四年より一九二一年に至るあらゆる内閣の報告に於て、二千六百萬乃至三千一百万デシヤチン（ロシアの舊度量衡に直して）即ち、二十五萬乃至三十萬平方ヴォールストとされてゐる。然るにこの省の全面積は十五萬四千五百九十五ヴォールストである。斯様にして政府の材料に依れば耕地面積は省の全面積の殆ど二倍である。

張作霖の王國、東三省に關する材料をとりあげて見よう。此處では權力機構は比較的堅實である。「平和と秩序」とは破壊されなかつた、不斷の内亂もない、そして自然的災害さえも通常の域を出ないこれらの省に關する材料は、ある程度の正確さを特徴にしてゐるに相異ない様に思はれるであらう。滿洲の三つの省の耕地面積は政府の材料に依れば次の通りである。（單位、畝）

年	奉 天	吉 林	黑 龍 江
一九一四年	五二、四二、七〇〇	四七、八二〇、〇五九	三三、八〇六、六四八
一九一五年	五二、二六、六三六	四四、二六、八〇六	三五、八七三、六八七

一九一六年
一九一七年
一九一八年
一九一九年
一九二〇年

五〇、三六二、〇〇〇

四五、一九四、一七五

四五、七九七、一四六

四三、七二六、五五三

八五、九八六、七六八

八五、八七七、三九二

八六、二五八、九七八

八一、二七一、六三六

三七、一五〇、〇六三

三七、一六五、〇二四

三八、八六五、五九九

(註) 何故か、中國に關する日本の材料は信用し得る、と思はれてゐる。そして例えば同志、ポポフ・タチ

ヴアの如きは努めてそれを用ひてゐる。實際、日本の材料は、それが滿鐵附屬地帯、日本企業の生産及び流通に關する限りでは信用に値ひする。併し土地關係に關する同じ日本の材料は科學的意義を持たない。

一九二二年に於ける日本政府の材料は、奉天の耕地面積を二億一千六百萬畝、吉林省のを一億五千六百萬畝、黑龍江省のを一億一千八百萬畝としてゐる。この數字を上引用した數字と比較せよ。

これらの數字の「不正確」なことは明かである。奉天省に於て政府の材料に依れば、耕地面積は五年間に五百萬畝だけ減つてゐる。併し衆知の如く奉天省にはこの期間激しい植民が起り、何十萬もの農民が直隸及び山東からこゝに移住した。斯様な状態の下に於て耕地面積は増大しなければならぬ筈である。黑龍江省に於ても、植民は嵐しの様な激しさで起つたのであるから、公式の統計に示された耕地面積の増加は決して植民の眞實の規模を反映してゐない。吉林省に於ては、この材料に依れば耕

地面積は一年間に二倍になつてゐる。併し耕地面積の斯様な増加は人類史上未だ曾て決して起つたことではない。

統計細工の同じ様な現象は他の省に關する材料に於ても見られる。特に廣東省に關する材料は教えるところが多い。この省は衆知の様な事情で我々の文獻では特別慎重に取扱つてゐる。この材料は次の如くである。

年	家族數	畝を單位とする耕地面積
一九一四年	二、六二四、一三四	二九、四三九、四一四
一九一五年	二、五六二、二九三	一三六、八七七、一四四
一九一七年	三、九二一、二〇七	二六、〇〇一、九〇〇

註釋は無用である。勿論、窮乏に追ひつめられてゐる農家の數が廣東に於て一年間に九百萬も増える筈はない、同じく、中國の將軍、地主、高利貸及び官吏が最近二ヶ年間に地上から八百萬家族を消し去り得た、など云ふ筈もない。同様に、耕地面積が一年間に一億七百萬畝増え、二年間に一億一千万畝減るなんてことのないことも明かである。こんな奇蹟は存在しない。

一九一七年に於ける廣東農村の階級的分化の有様を示す甚だ興味ある材料を、上に引用された數字と比べて見よう。

耕地面積 (畝)	家族	
	絶對數	數 %
十畝まで	二、〇八三、二五二	五二・〇
一〇 — 三〇	九三六、一〇七	二四・五
三〇 — 五〇	五三三、三二二	一四・一
五〇 — 一〇〇	一、四三、〇四〇	六・二
一〇〇以上	八三、五八七	二・二
合計	三、九六、二〇七	100・0

若し、第一のグループに於て各家族の平均の規模が五畝であり、凡て他のグループに於て最小規模のみをとる（即ち第二のグループに對して一〇畝、第三のグループに對して三〇畝、第四に五〇畝、第五に百畝をあてがう）とすれば、廣東省の耕地面積は五千七百十四萬四千六百九十畝となる。これは最低の數字である。然るにさきに我々は同じ部の同じ報告から、二千六百萬一千九百畝と云ふ數字をあげてゐる。

併し中國の農村の土地關係、階級分化等を反映すべき筈のこれらの興味ある統計材料を農務部の罪

にするのは酷である。我々は今に至るまで中國の人口數の如き簡單に見える事柄をも知らないのではないか？ 中國の官僚は非常に早くから人口調査を財政的稅政的目的からやつてゐた。中國の資料を信ずるとすれば、第一回の調査は紀元前二千二百五年に行はれてゐる。それ以來中國には六十七回の全中國にわたる人口調査が行はれた。この調査が如何に行はれたか、如何なる強制と人民の壓迫を以て、上級政府に對する欺瞞を以て行はれたかについては、ロシアの學僧、ザハロフが可成り立派な本を書いてゐる。（ザハロフ、「中國人口論」）併し一七一二年に至つて始めて、人頭稅は土地稅となり皇帝をして『人口の増加は將來、課稅に従屬することがないであらう』（康熙帝、一七一二年の布告）と云ふに至らしめた。そして、この時人口は一七一一年の二千四百萬九十八萬五千三十九人から一七四九年の一億七千七百四十九萬五千三十九人に、一七八三年の二億八千四百三萬三千七百五十五人に増加したことがわかつた。アメリカの宣教師、ロツスの言葉を以てすれば、國家機構のあるところ「人民から税金を絞りとる工場があるわけであり、それ以外ではない。全國土は官吏の買收の的となつてゐる、かゝる機構から「統計」を期待するのは幼稚な、且つ有害な幻想である。統計は可成り發達した資本主義の結果であり、堅固な且つ發達したブルジョア國家機構の、活動の成果ではないか？ ヨーロッパの中世紀も封建時代も同じく統計を知らなかつた。フランスに於て商務主計總監トロザンは一七八九年商業状態につひて正確な材料を出し得なかつた。國民集會及びコンヴントの諸委員會は最も基本的な彼等に興味を持たせる問題に關しても何等數字的材料を集め得なかつた。ロシアの歴史

家タルレが次の様に云つてゐるのは全く正しい。『あらゆる歴史家は十九世紀に先だつ時代の統計的材料に如何に慎重に且つ懐疑的に向ふべきかを知つてゐる』(E・V・タルレ「革命時代に於るフランスの労働階級」(四七頁)と。勿論、これは明かに一つの冗談にはすぎないものではない。

中國の中世紀はこの點に於てヨーロッパの中世紀に優ることは決してない。旅行家、ヴェニスの人マルコ・ポーロは曾てフビライ汗の下に於ける財務「顧問」であり、貢納收税吏であつたが、その材料に依れば杭州に労働者だけで、十三世紀には百六十二萬八千人の人間が居たと云つてゐる。(Marco Polo's Travels, 第二卷、一八六頁)

だが中國の人口數にかへらう。材料は多い。舊米國公使、ロスヒルは一九〇四年に中國の人口を二億七千萬人と規定してゐる。一九一〇年の「調査」以前の政府の材料に依れば、一八四三年の調査に依つて人口數は四億一千三百萬になつてゐる。一九一〇年の「調査」は中國に三億二千七百萬位の人間しか居らぬことを示した。ドイツの學者、クリス(V・クリス—über Volk und Staatshausalt, 上海、一九二六年、一三二頁)は鹽の需要に基いて中國には二億三千二百萬位の人口しかないと算定した。併し彼は中國には鹽の不正貿易が盛んに行はれて居ると云ふことを見のがしてゐる。其他彼は勝手にドイツ農民の鹽需要額から出發してゐる。併し中國の農民がドイツの農民よりもずつと鹽を使はないと云ふことは誰れでも知つてゐることである。さらに海關も人口統計を發表してゐる。それによれば一九一三年に國內の人口は四億四千四百九十六萬八千人である。一九二六年には四億四千八百二十三萬一

千人である。中國の郵便局も、亦自流に國內の人口を一九一三年に四億三千六百三萬四千九百五十三人としてゐる。さらに一九二七年には四億八千五百五十萬八千八百三十八人としてゐる。その際海關の委員自身その報告に於て彼等がその委員である開港市の人口につひてさえそれは正確な數字を示してゐないと云つてゐる。我々は上海の人口に關する正確な材料さえも持たない。

イギリスの統計家、(Ricard Ewple 'Population Statistics of china') テンプルは中國をインドと比較し、中國の人口は二億八千二百萬人に達すると云ふ結論に達した。一九二六年有名な中國通で且つ統計家である英人ウイルバーンは三億と云ふ數字は誇大に失する、と云つてゐる。では何人が正しいか？ 中國政府か？ 海關當局か？ 中國の郵局か？ 或ひはまたロツクヒル、テムプル、ウイルバーンの徒か？

『中國の歴史に於ても、中國の統計に於ても、國內の人口が十九世紀に増加したと云ふ事を指摘した信ずるに足るものは見出し得ない。内亂、飢饉及び水害が人口の自然的増大を飲み込んで了つた十九世紀及び二十世紀に於て中國に起つた戦争と災害は人間の生命を破壊したと云ふ意味に於てヨーロッパ或ひはインドに於ける戦争や自然的災害よりもより重大であり、破壊的であつた。中國に於ける飲食物の生産が最近二世紀間に増大したと云ふことを示す材料は何も存在しない、また國內の人口が増加したと豫想すべき何らの根據もない。』(E. Wilbur 'The Population of China'—400,000,000—300,000,000?)

鹽務署統計課長にして中國の統計問題に對する大權威たる、陳長恆も同様に、十九世紀に於て中國の人口の増加は世界の如何なる國よりもおそかつた、と云ふ結論に達してゐる。「收賄の蔓延、社會的収入の空費、重税、農業の荒廢、反亂、破壊的水害、太平天國の亂、マホメツト教徒の反亂、甚しい飢饉、内亂、及び國內の一般的經濟状態は遂に死亡數を出産數より高めるに至つた」と陳は云つてゐる。そして彼はウイルバーンと共に、十九世紀及び二十世紀の中國史の一般的傾向を正しく指摘してゐる。

インドに於けるイギリスの統治の始めにあつて人口數の減少があり、インドに於ける農業の基礎即ち農業技術が甚だしく中國の農業技術に似てゐることを想起するならば、我々は容易にこれらの結論の正しいことを認めるに至るであらう。フランスの歴史家マゼリエルは維新以前の日本に關聯して同様な結論に達してゐる。一七二〇年から一八七〇年に至る百五十年間にわたつて日本の人口は居坐りのまゝであつた。この唯一の原因は飢饉である。封建制の顛覆後始めて日本に於て人口の増加が起つた。(Macseer 《Japon des Tokugawa》 405頁)

併し日本の飢饉、インドの飢饉さえも中國の飢饉とは比べ得ない。マルクスは一百萬の人口を減ぼした一八六七年のインドの飢饉を、恐怖の眼を以てしるしてゐる。一八五七年に於ける黄河の氾濫、河床の轉移は七百萬人の中國人を極樂へ送り込んだ。イギリス大工業の競争は七百萬人のインドの織工を肉體的に減ぼした。併し太平天國亂に際しては、またマホメツト教徒の反亂の結果、約二千二百

萬人の人間が死んでゐる。中國の年代記は清朝時代に、旱災に依る百六十七回の大規模の飢饉、水害に依る三百二十四回の飢饉、蝗災による三回の飢饉を記録してゐる。一人のアメリカ人は中國の年代記に基いて一六二〇年より一九〇〇年に至るまでに中國に全地方にわたる千五百六回の飢饉が起つてゐると云つてゐる。まことに中國は飢饉の國と云ふの名にふさはしう。(Malory; 「China—Land of Famine」)

一八七六一一八七九年、山西、陝西、直隸、河南及び山東の一部に雨が降らなかつた。その結果用心深く見積つても九百萬人、若干の外國飢饉救援委員の報告によれば千三百萬人の人間が死滅した。救援組織のよかつた事、鐵道通信の存在のために一九二〇—一九二一年の山西飢饉においては五十萬人の死亡者を出したただけであつた。一九二五年には甘肅省に於て中國郵局の報告に依れば、文字通り一郡のものが死滅してゐる。「農民は時付けは行ひ得たが、收穫を得ることができなかつた、それらは原野のなかで朽つて了つた。」——我々はこれも郵局の報告中に讀む。富者が土を喰へば死ぬが貧者が喰へば死なぬと云ふ謠言が擴まつたため、農民は當時地面を喰つた。富人は土を喰はないで死ななかつたが、貧民は土を喰つた上で死んで行つた。雲南に於て一九一九年に同じく激しい飢饉が起つた。「生産物の價格は未曾有の高價に達した。自分の家族を維持し得ないで多くの者は土匪となつた。政府はインド支那より米を輸入した。……米價投機が始つた。米商がもうけたが、民衆は苦しんだ。遠隔の地方に於て全一村が自分の故郷を見棄て大都市にやつてくる様なことも起つた。農村民は自分の

子供等が飢餓に苦しむ有様を見まいとしてこれを殺害した。大人たちは飢餓のために、路傍に行倒れた。(前掲書、二九一、三一頁)海關委員は斯様にしるしてゐる。一九二七—一九二八年山東省直隸省、河南省に於て九百萬人のものが餓え、あらゆる材料に依るに、四百萬人は飢死してゐる。

凡て此等は國內人口に關する中國の統計が近似的でないのみならず、傾向を示すものでもないことを示してゐる。人口數は最も正確なところ、四億よりも三億に近いようである。

耕地面積の規模についても同じ様なことが云える。ジエムソンは一九〇五年、中國の耕地面積を二十四億畝と云つてゐる。(Return of Trade and Grode Rebot 1919 二部、第五卷、一三二九頁)中國の海關總稅務司、R・ハートは皇帝に送つた覺書きに於て耕地面積を四億畝と云つてゐる。(この覺書は

一九〇四年四月十五日付の「North China Herald」に引用されてゐる)農商務部は一九一七年に於ける耕地面積を十三億六千五百萬畝と云つてゐる。(この數字には廣西、甘肅、新疆の諸省が入つてゐない)併し我々は既に各部の統計がどれだけ信用し得るかを知つてゐる。それは遠隔な各郡に於ける土地記録を基礎にしてつくられた。各郡は各省に報告を送る、各省は政府に送る。何時かの時に財政上の目的のみで、即ち土地稅土地賣買に對する課稅の目的でつくられた土地記録は全く次の様に云つてさしつかへないであらう。「土地記録は既に數百年、恐らくは千年も前のものである。……これらの記録の導入は我々が記録と稱するものに對する侮辱である。(舊の)ドイツの租借地、膠州に於て行はれた凡ての測量は……記録材料が一つの場合として眞實にあてはまつたことがなかつた、と云ふことを示して

ゐる。」(ワグネル「Die chinesische Landwirtschaft」一二九頁)

中國に於て統計材料を集める上に於て甚しい客觀的困難をなすものは度量衡の問題である。アヴェ
マラコフはこの問題に關して大論文を書き、中國の全度量衡を聚集しようとして云ふ殆どあてもなささう
なことを企てた。(東洋專制政府の統計材料に信用する事がどの位誤謬に向ふことになるかは朝鮮の例が示す。
公式の材料のよるに朝鮮の人口は一九〇五年に五百萬人であつた。日本によるその占領及び併合後、一九一〇年
調査が行はれ、その人口は千三百萬であることがわかつた。)面積單位畝は我々の文獻では十六分の一デシ
ヤチンに等しいとされてゐる。併しこれは甚だ不完全なことである。公式には一畝は六千平方フット
とされてゐる。併し例えば濟南に於ては八千平方フットの畝、一萬七千五百平方フットの畝がある各
省、殆んど各郡、甚しい時には各村々にその畝があり、その度量衡があり、その際、凡てこれらの度
量衡は甚しく相互に大いさを異にしてゐる。一般に一畝は二百五十七平方メートルから九百二十七平
方メートルの間にある。勢力家はこの「不正確」を自分の利益になる様に利用する。江蘇省北部には
豪紳の「借りる」ところとなつてゐる「共有地」なるものがあるが、それは普通よりも倍も大きい尺
度ではかられる。それによつて地租も地代もずつと少くなる。

斯様に我々は耕地面積に關する近似的な、傾向を示す様な材料さえも持たないものである。

東洋の專制政府は家族を政治上、經濟上、及び——これが最も重要なことであるが——財政上の單
位と見なしてゐる。中國の年代記は屢々人數(中國流に云ふと口數)をあげないで「戸數」だけをあ

げてゐる。(「滿州通信」一九二七年 七號) 日本に於ては維新前までは人口調査に際し、課税を受けない子供は全然計算に入れられなかつた。中國に於ては警察は現在でも家族數のみを調べてゐる。家族は行政上及び財政上の單位である。我々はこの方面からでも問題に接近して行つて、多分、いくらかでも根據のある。人口數及び耕地面積に關する結論に達するであらう。

農商部の材料によるに農家の數は一九一四年に五千九百四十萬二千三百十五、一九一五年に、四千七十三萬七千八百八十六、一九一七年に四千八百九十萬七千八百五十三、一九一八年に四千五百九十萬五千四百七十五である。この數字は明かに實際を正確に反映してゐない。常に飢餓線上にある中國の特別な状態を以てしても、一九一四年から一九一五年に至る一年間に、地表から千九百萬の農家が消えさると云ふことは不可能である。同様に最近二ケ年間に、八百萬の農家が生きかへることも不可能である。農商務部はこの飛躍を、各年度におけるこの總數に、若干の省が入らなかつたと云ふことに依つて説明してゐる。併し問題は勿論こゝにあるのではなく、國家機構そのものにある。農商務部の統計集の序言に於て「この統計集のあらゆる材料は、農商務部の特別定めた形式を以てせる各郡特別區域及び省の長官の報告に基いてつくられた」と云つてゐる。國家機構の性質を知れば、眞面目にこゝの材料に向うわけには行かなくなる。ポポフ・タチヴァが「中國の統計」を擁護する限り、彼は一般に東洋の専制、特に中國のそのの本質も階級内容も見ることをしてしない。そして唯、一九二七年に至つても、マルクス主義者は中國の統計を批評するにあたり、一八四〇年にロシアの學僧ザハロフ

が達した水準にも達しないのを悲しみ得るだけである。譚啓宇なる人は中國の科學協會の雜誌「科學」一九二四年十二月に於て、中國に五千七百一十萬の農家があると主張した。一般に認められたある中國の研究書は、中國に五千一百萬の農家がある、と主張した。それ以來論文、諸研究、演説及び檄等に常にこの數字が用ひられることになつた。併しそれが何に根據を置くかは誰も知らない。(日本に於て一九二〇年まで、人口調査は舊習慣に従つて戸毎に行はれた、それを行つたのは近代的な斯様な仕事に適した官僚であつた、然も一九二〇年の個別調査は、今までと約七十萬の差異のあることを示した。)

統計其他、最大の忠實さと慎重さを以てなさるべきこの種のあらゆる研究に際して、二つの契機を數えなければならぬ。第一に五千年にわたる苦い經驗によつて、自分の政府に決して自分の家族や經濟状態につひて眞實を語らない中國の農民がある。彼等が、それによつて彼等はまた新しい税金強奪に脅かされることを知つてゐるのである。民間の迷信によつて、米の脱穀、繭の聚集されるときに局外者の來ることを最大の不幸としてゐる。そして子供等に對して、收穫が如何であつたか語る事は嚴重に禁ぜられてゐる。この習慣が中國の事情の下に於て合理的な根據を持つてゐることを認めるべきである。統計研究に従つたあらゆる人々は、中國に於て如何なる材料にもせよそれを集めるに如何なる困難を要するか知つてゐる。不信の氷は、農民運動の發展した廣東其他の省に於て始めて解け出した。農民組合の指導者に農民はよろこんで眞實を告げてゐる。

第二に、あらゆる中國の官吏は、農村の村長から始つて大臣に至るまで、自分の長官に眞實を告げ

ないで、それに嘘言を吐く。あらゆる者は人民から自分自身のために出来るだけ澤山とり込まうとする。長官は分捕物の分前を得るのが重要である。彼は實際に於て、自分の部下がどれだけ集めたか、には無關心である。それ故、財政上租税上の材料を基礎にして、どんな結論でも、結論を引き出さうとするのは全然、無駄な事であり、馬鹿げたことである。

我々が持つてゐる材料が如何に不正確であり、役にたゝぬものであるにせよ、一つの事實がこれによつてわかる。それは全領土と國內の耕地面積との間の甚だしい食ひ違ひである。外國の研究家が大都市をのみ訪問し、主要な大河や、貿易路に沿ふてのみ旅行してゐた頃までは、中國に於ては「あらゆる土地のかけら」までが耕作されてゐる、と考へられてきた。中國土地關係の權威、ジエムソンが耕地面積を國內面積の五十%としたのはこの理由からである。この國をより徹底的に知るに及んでこれがはるかに正しくないと云ふことがわかつた。政府の材料に依るに、耕地面積は國內全面積の一・六%である。併し、オアシスによる、人口灌漑による農業が、農作を甚だしく狭い範圍におしこめてゐる新疆、奉天省をのぞきそれから尙甚しい被殖民地及び森林を持つてゐる滿洲、殖民がやつと始つたばかりの内蒙古の如き、人口稀少の地域をのぞき、中國本部十八省に問題を限れば、政府の材料に於て、全地表は三百九十三萬六千平方キロメートル、耕地面積は一百十三萬六千五百一十一平方キロメートルとなり、即ち二十八・九%である。「少しでも中國の條件を知つてゐる人々は凡て、この數字にも強い疑ひを持つに違ひない」と、ヴァグネルは、この數子を誇大に失すると考へて書いてゐる。

カハノフスキーの材料（カハノフスキー——「中國に於ける土地所有と農業」一千頁）によれば中國に於て耕地は全地表の僅か十五％である。フランスに於て地面の五十三％が田畑であり、十一％が草地と牧場であり、十七％が森林であることを考へ、またオーストリアの如き山の多い國でさえ、地面の三七・六が田畑であり、十九％が草地と牧場とであり、三十二％が森林であることを考へれば、この國の耕地面積と全領土との甚しい不均衡を見ないわけには行かぬ。

日本に於ては耕地面積を擴めようとするあらゆる努力にも拘らず、日本の農民は土地の狹小から免れるために文字通り山を切り開いてゐるにも拘らず、耕地面積は全地表の僅か十七・五％にすぎぬ。山西、甘肅及び陝西北部に於てはあらゆる信じうべき材料を綜合するに、耕地面積は全地表の僅か二％である。山西「模範」省に於て、政府の材料を以てするも、全地表は七億畝であるに拘らず、耕地面積は四千萬畝である。人口密度の多い廣東に於て耕地面積は、政府の材料によるに、全地表の七％である。數年間廣東の土地問題を研究する機會を得た我々の同志達は、耕地面積は省領全體の七一・一〇％を越える位ではなからうか、と云つてゐる。

我々は以下に於て、この事情のうちに、その原因のうちに、中國の土地關係の特質を理解すべき鍵の一つが匿されてゐるのを見るであらう。我々は前以て、一般に中國に於ける非耕作地は國民經濟から見て殆ど何等の價值もないと云ふことを指摘しておきたい。國內に森林のないと云ふことは、歴史的發展過程のうちにあつてこの國に於ては異常な範圍に達してゐる。——滿洲——尤もこゝでも禿山が

最も急速に擴りつゝある——湖南省の西南部、貴州に於ける烏江の流域、福建に於ける閩江の流域、四川省西部の若干の個所をのぞき、中國には森林と云ふものがない。強奪的な經濟は中國に於て、最後にのこつた貧弱な森林までもを滅亡させ、それに依つて、至る處の省といふ省を死滅させ、氣候の變化を甚しくし、洪水と旱害の機會を多くしてゐる。中國には草地も牧場もない。國民經濟の一部門としての牧畜業は歴史的發展過程のうち、に於て次第々々にその意義を失つて行つた。家畜を、勞働用、搾乳用、食肉用の三つに分けるとすれば中國には多かれ少かれ一般的な現象として唯、勞働家畜が存するのみである。しかもそれもヨーロッパやアメリカの農業に於けるに比するに非常に小さな役割を演じてゐるにすぎない。搾乳業及び搾乳家畜は、決して中國に見られない。莫大な荒地のある滿洲に於てさえ、牧畜業のための草地や牧場はない。一般的經濟制度のなかに於て一定の比重を持つ經濟的範疇としての牧畜業は、唯中國領トルキスタン甘肅に於ていくらか行はれてゐるにすぎぬ。此等の地方では、マホメット教徒がこの業に従つてゐる。また内蒙古にも牧畜がある。併しこれらの地方でも牧畜業の役割と意義とは衰退して來た。なぜなら最良の牧畜場、草地は田畑となつて行くから。蒙古人回教徒は牧畜業から農業に移つて行く。牧畜業はより悪い土地へ土地へと移つて行く。

中國の農村經濟は従つて森林も、草地も、牧畜場もなしに存在するのである。中國の農民は田畑をなす、中國領土中の十五%か二十%の土地の上で「生きるか死ぬか」するのである。それ故國內の總面積と耕地面積との間の不均衡及びこの不均衡の原因は特に重要な意義を持つてゐる。この不均衡を

特に自然的原因のみから説明してはならない。オーストリアは中國よりもより山國である、然も、田畑は全國土の三十七・六%を占めてゐる。今後我々が知るであらう様に、自然的原因は經濟的、技術的及び社會的原因ともつれあつてゐるのである。

耕地面積と國內の全地表との間のこの甚しい不均衡と共に、人民數と田畑との間の關係に關する甚だ本質的な問題が起る。普通、全面積とその全人口とから出發して各國の人口密度を比較する。かゝる比較は、併し、こんな場合には何にも役にたたない、なんとなれば、例えばフランスの人口密度と中國の人口密度とを比較するに、中國の耕地面積は全國土の十二%から二十%位であるのに反し、フランスの耕地面積は五十三%であるから。我々が人口密度のはつきりしたものを得ようとする場合、比較の基礎に全國土でなく、その國の耕地面積をのみとりあげなければならぬと云ふことは全く明白至極な事である。中國の場合には、我々が正確な、信じ得べき、人口に對しても耕地面積に對しても、材料となすべきものを持たぬと云ふ事情が甚しい困難となる。この困難は撰擇的調査の材料に依つても排除されない。併しこれらの材料はある程度まで農村人口と耕地面積數との關係に光りを投ずる。當分、中國に於ては田畑が家畜をも養ふので與えられた領土に於て家畜數をも考慮しなければならぬ、と云ふ事情を除外するとして、選擇研究の若干の與えられた材料を調べて見よう。

アメリカの農學者キング (King — 《Farmers of Forth Centuries》 一七頁) は、山東省のある個所に於て耕地一平方哩につき人口一千七百八十三人であると云つてゐる。有名なイギリスの中國通スミス

は山東省のある郡に於て一平方英里あたり五百三十一人、他の郡に於て二千百二十九人を算えてゐる。これらの材料に基いて、また自分の無数の觀察に基いて、ドイツの農學者、ワグネル (ワグネル——*Heie chinesische Landwirtschaft* 1113頁) は中國の平均人口密度は耕地一平方哩あたり一千二百八十五人だとしてゐる。

揚子江の出口に川のはこんできた泥土及び砂から出來た崇明島と云ふのがあるが、その人口は耕地一平方哩あたり三千七百十人に達する。

安徽省に於て百二の農家に對する選擇調査の結果、耕地一平方哩に人口八百二十六人が居ることがわかつた。(バク—*An Economic and Social survey of 102 farms Near Wuhu Anhwei china* 111頁)

アメリカの飢饉救援者の行つた選擇調査は直隸、江蘇、山東及び安徽の各省にわたり、二百四十ヶ村にわたつたが、次の結果を得た。

省名及び縣名	農村數	人口數	耕地面積(畝)	一平方哩あたり人口密度
浙江				
勸縣	一四一	二八六	一、一三六・四	二、二七〇
		!	二、九七一・六	四、六五〇
		!	四七四・〇	六、八八〇

* 此の數字は調査に際して地方の畝を取つたと云ふ理由で、疑はしい點がある。訂正して見たところに依ると一平方哩あたり千八百人と云ふ數字が出る。

江蘇	安徽	山東	直隸	磁縣
宣興	吳江	壽州	遵化	磁縣
江陰	江陰	昌化	定縣	邯鄲
五	一七	二〇	一八	二〇
二、〇八四	三、四一四	三、四七八	九、〇八五	三、〇二四
四、一二〇	五、九〇〇	二八、八四三	二〇、〇七三	四、五三〇
一、七七〇	二、〇五〇	二九〇	二〇一〇	一、四五〇

勿論勝手に取りあげた選擇研究を基礎として一般的結論をつくり出すことは正しくない。併し尙我々は、耕地對人口密度に於て中國が、人口密度の濃い極東に於てさえ首位を占めてゐる、と云ふ印象を得るに至る。日本に於て耕地一平方哩あたり人口密度は最高一千九百二十二人である。インドに於てはボンベイで三百八人、マドラスに於て六百十四人、聯合省に於て八百十六人、ベンガルに於て千六百十二人である。上に引用された中國各省の材料は、中國の北部諸省に於てインドの人口密度を、中部諸省に於て日本を越え、南部に於てはジャヴァの若干地方をのぞき世界の何處をも越えてゐることを示してゐる。ここで指摘して置きたい事は耕地一平方哩あたりの人口密度が北部から南部に行くに従つて増加することである。南部へ行けば行く程人口密度は多くなる。これは南部に於ては一年に二回三回の收穫が得られ、それに依つて、一人の人間の給養に要する土地の廣さが減少するのに依る。今後我々が知るであらう様に、この事情のみが人口密度を規定する諸要素を盡すのではない。この點に於てはその地方が如何にそしてどれだけ水の供給を受けてゐるかと云ふことが一層重要である。河川の流域、水源地附近、湖水の附近に於て人口密度は最高水準に達する。中國にとつて特徴的であるこの事實は同じくまたインド、日本、インド支那及びジャヴァに於ても認められる。インドに於ては季節風のもたらす雨量の多い地方に於ては季節風に見舞はれない地方よりも人口はより稠密である。人口密度は他の條件が同じならば人工灌漑の規模に應じて増減する、——これが中國及び一般に極東に於ける人口密度法則の一つである。揚子江流域の米田地方に於ける人口の稠密は觀察者を驚かせる

ものがある。

第二のこれにも劣らず重要な法則はその地方の人口密度が、耕地面積中の、二毛作、三毛作の利く部分の率に依ると云ふ事實である。二毛作の利く水田が多ければ多い程、他の條件が同じなば、人口密度は高い。而してこの中國にとつて特徴的な事實は統計的に日本及びインドにも認められ得る。

正しくこの最後の事情こそ、一見して説明に困難な、この選擇調査に於ても、一般的觀察に於ても見られ得る、中國の南部諸省、或ひは中部諸省の耕地さえもがインド及び日本よりも人口密度が多いと云ふ事實を説明するのである。日本に於ては全耕地の一九・六%が年に二回の收穫をあたえるにすぎない、インドに於ては省によつて異なるが、全耕地の大體十四%から三十%である。我々は中國を全部にわたつてとりあつかつてゐない。然も選擇調査を基礎として見るに、中國には北部に於て四〇%から五〇%、中部に於ては多くの個所に於て八〇%の耕地が年二回の收穫をもたらす。南部に於ては三回のところさへある。これが耕地の人口密度に於て中國が日本及びインドを凌ぐ理由である。

中國の土地は、斯様にして絶對的にのみでなく、相對的にも、世界の他のどの國の土地よりも多人數の人間に生活手段を供給してゐるのである。農業人口過剰と云ふことはそれ故あらゆるブルジョアの中國研究の基本問題となつてゐる。中國に關する可成大きなイギリス及びアメリカの文獻で、中國の不幸の凡て、或ひは大部分を人口過剰で説明してゐない様な著者は一人も居ない。これらのブルジョアの俗學者、帝國主義の代辯人は、中國の高利貸資本の觀念的代理人と一緒になつてマルサスの

人口論を一層下手にくり返す。帝國主義、高利貸主義及び中國社會制度の「研究家」連は、「收獲遞減」の法則を復活させて自分の無稽なマルサスの議論を「確證」しようとする。あらゆる罪は子澤山の中
國婦人にある。中國の土地の生産力は人口の如く急速に増大しない。そこからあらゆる不幸が起る、
と云ふのである。帝國主義、軍國主義、地主及び高利貸の抑壓は不幸に對して責任はない、國を救ふ
道は産兒制限である、と云ふのである。

これらのプルジョア俗學者と議論する事は無意味である。帝國主義は植民地市場に於て商品中の屑
や廢物をさばくだけでなく「人間的素材」と云ふ意味に於て屑物であるあらゆる山師をここにさばき
其上、思想界に於て時代おくれになつた舊い屑物的學說をも此處ではたぐるのである。これらの「理論」
とは云ひ争ふだけの値打がない。若干の基本的事實を指摘すればそれで充分であらう。

(一) 中國の農民の家族の多人數であると云ふお伽話は單にお伽話にすぎない。農民の家族は平均
四―五人である。これはあらゆる材料、あらゆる調査の證明するところである。

(二) 中國の出生率は世界の何處の國よりも低い。これはあらゆる手に入れることを得た事實及び
觀察が證明してゐる。

(三) 中國の死亡率は世界のどの國よりも高い。北平に於て男子の死亡率は毎年、千人に對して三
十三人、女子は四十二人である。最近發表された中國の保健状態に關する政府の報告に依れば、中國
の死亡率は一年平均千人に對して三十人(英國一十・四)に達し、この國では、文明國に於て普通で

ある程度よりも毎年六百萬人づつ餘分の人間が死ぬのである。種痘の存在しないことだけでも九十萬の人間があゝの世に旅立つ。中國人の平均生存期間は三十年である。然るに英人は五十八年である。出生兒の死亡數は千人につひて英國では六十九なのに對し、中國では二百である。イギリスの中國に對する「贈物」——阿片——は凡てこの點に於て非常な役割を演ずる。これらの状態の下に於て人口増加の「急激すぎる」ことを云々するには非常な理論的恥知らずが必要である。

(四) 産兒制限は中國では既にづつと以前から行はれて居り、それは幼兒殺害の方法で行はれてゐる。餘分な子供、主として女子は出生後殺される。中國の研究家として凡庸でない英人、ヴァーナーはこれにつひて戰慄すべき事實をしるしてゐる。(Verner "China of the Chinese") 英國の婦人宣教師フィッセルは八十年代の廣東に於て「女子出生子の殺害は此處では非常に擴つてゐる。」(“Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society 188”)と報告してゐる。廣東に於てこの「習慣」は現在に於ても「非常に普及してゐる」。我々は中國の人口のことを書いた書物で一歳から十歳までの男子兒童の數が著しく女子兒童の數を越えてゐるのをしるしてゐない様な書物は一つも見ない。然るに、若干の極東の諸國、インド其他をのぞいては世界の至る所これとは反對の現象を見るのである。(註四、イギリスに於ては女子の數は男子の數を1.2%だけ超過する。インドに於ては男子の數が女子の數を32%だけ超過する。) ブルジョア研究家はこの事實を習慣、宗教、基本的國民宗教としての「祭祠」等に依つて説明してゐる。彼等は云ふ、中國人は女子を血統の繼續者と見なさず、宗教上の教義に従つて、男

子と異り祭祠し得ないものと考へてゐる、と。中國及びインドの婦人は女子よりも男子を甚しく生みたがる。アメリカの教授、バツクさえ次の様に書いてゐる。「この事實（男子兒童の女子兒童數を超過すること）の善く知られた二つの原因がある。第一に幼年時代に女子よりも男子の方が大切にされる、それでより注意深く育てられる、第二にいくらか女子は放棄（殺害）される。」（Buck — An Economic and Social Survey of 102 Farms 16頁）問題が生産率にあるのではなく、反對に死亡率にあることが明かになつたであらう。この際人口増加のあまりに急激すぎることを云々するのは恥知らずすぎる。

（五） 自然的災害は屢々何百萬もの人間を滅亡させる。

（六） 中國に於ける資本主義的發展の開始、中國の工場、鑛山及び職場に於けるいたましい慘事ははげしい人間の消耗となる、漢治萍公司の鑛山に於てはロツクフェーラー研究所の眞重な調査に依るに全労働者中の八一・六％は病人であつた、と云ふ。（コリンズ “Mineral enterprises in China”）湖南省に於ては全村—男女、子供までが—官營の朱砂鑛山に働いてゐるところがあるが「非衛生的條件の結果、全村が次第に毒殺されつゝある。」（“Papers respecting Labour Conditions in China” ロンドン

30頁）湖南省のいくたの銅山に於ては労働者中の四十％が肺病で死んで行き、精米工場では三十％乃至四十％が死ぬ。（同書、30—31）上海の工場では子供等が晝夜の差別なく十二時間働かされる、漢口では婦人が絹工場に於て十六時間働かされてゐる。我々は中國に於ける紡績女工の平均就業期間を知

らはい。併し衛生状態がはるかに良く、労働時間の長さも短かく、労賃も少しはよい日本に於て 大阪其他大都市の諸工場の女工は一年そこそこしか工場に居ない。中國の鑛山、工場は毎年、従業員中の六〇―七〇%を滅亡させ、彼等を乞食、放浪者の群に投じてゐるのである。近代的家内工業はこの工場生活の魔力を農村にも持ち込んでゐる。中國には二百萬の盲人が居ると云はれてゐる。大部分それは刺繡労働で盲目になつたのである。「中國北部の最も大なる近代的工場に於て、調査の結果、労働者中の九十五%がトラホームであることがわかつた。」〔上海タイムズ〕25.53 1927, 12頁)

(七) 中國の將軍達は自ら人口があまりに急激に増えない様な手段をとつてゐる。中國の將軍苦手のポリシエヴィクでなく、福州駐在のイギリス皇帝陛下の領事、クレネツツ氏がマクドナルドに對する報告としての次の様に云つてゐる。

「舊督軍李厚基は私に語つた。福建省、特に福州及びその郊外はその生産資源に比し人口が多すぎ、全人口を養ひ得ない。これは、甚しい人間の剝滅を伴ふ内亂及びタタール人の攻撃によつて定期的に淨化されてきた中國の他の部分と異り、福建には何千年の間かやうな人間の剝滅がなかつたと云ふ事情で説明される。……戦争はあつた、併し揚子江本流諸省の人間を剝滅して了つた太平天國の亂の様なものもなかつた。……自分は李將軍がかゝる剝滅を現在希望してゐる、と主張したくはない、併し自分は、彼が殺戮による人民の定期的刈取りを人民の制限のため自然のあたえた平常の手段と考へてゐる、と思ふし、また現在の状態はこの手段の適用を遠からぬうちに必要とすると感じた。」

中國支配階級のかゝる叫び聲を聞き、軍國主義の人民剝滅に對する親切な協力のある以上、人口が（眞面目な調査者の意見によるに）増加しないで、減つて行くと云ふのは全く自然なことである。

凡てこれらの事情により、中國には莫大な相對的過剩人口があると云ふことは疑ひを容れない。中國の今の技術水準では、今の社會状態では、今の勞働生産力では、中國の土地は現在の農村人口を養ひ得ない、ましてや都市が農村から莫大な量の餘剰生産物ばかりでなく、農村生産者自身を養ふに必要な生産物をも紋りとるに於ては尙更である。

かくて都市及び農村人口數の間の關係が問題となる。我々は「統計的描寫」を完全にするためこの問題に觸れざるを得ぬ。

斯様な信用し得る且つたのみになる様な數字上の材料はない。種々な著者達に依つて引用されてゐる材料を點検することはコーヒーのよどみによるうらなひよりいくら増しだか疑はしい。都市人口二〇%、農村人口八〇%と云ふのが一般に採用された意見である。若干の中國の著者、またそれによる英國の學者達は中國の都市人口を國內全人口の三〇%とする意見である。

この最後の數字は明かに大きすぎる。レヴァセルの材料（*Levauxcelle* 「Histoire de la Population vivante 1874」）によるに大革命前のフランスに於て、都市の人口は當時の統計を信用する限り、一九四萬九千人である。總人口は二千三百萬人であるから、僅か全體の八・四%にすぎない。北アメリカ合衆國に於て都市人口は一八八〇年に全體の二九・五%、一八九〇年に三六%、一九〇〇年に四〇%、一九

一〇年に四六％である。工業の發達がづつと進んでゐる日本では都市人口は一九一三年に三三％、一九二七年に至つてやつと五〇％を越えた。工業方面においておくれれてゐる中國に於て、都市對農村の人口比率が日本の一九一三年の水準に、或ひは一八八〇年の北アメリカ合衆國の水準に達してゐたと考へるのは困難である。

經濟方面に於て中國よりもより進んでゐるインドでは農村人口は全人口の九〇％である。その四分の三は農業に従ひ、四分の一は商業、高利貸業、手工業其他に従つてゐる。歴史的發達のために、中國の都市は他の東洋專制諸國の都市と同じく封建時代のヨーロッパとは異つた役割を演じてゐることに注意しなければならぬ。「中世に於て、イタリーの如く封建制が都市の例外的な發達によつて解體せられないところでは至るところ、農村が都市を政治的に搾取した、他方都市は至るところで、例外なしに自分の獨占價格により、自分の租稅制度により、自分のツンフト制度により、自分の直接の商業上の欺瞞及び高利貸付により、經濟的に農村を搾取した。」（カールマルクス「資本」第三卷、三三七頁）

これはヨーロッパの中世紀に關する事實である。併し中國に於ては非常に早期の發展段階に於て政治權力は既に都市に屬してゐた。地主は都市に生活した。都市は地代の一部を占有した。商品經濟及び貨幣商品關係の早期の發達によつて中國は、ロンドン、パリ、アムステルダム、ハムブルグがまだ小さな村であつた頃に既に大きな都市を持つてゐた。西安、北京、杭州、廣東はづつと昔から世界の

大都市であつた。(註、この主張は十二世紀頃のものである。中國の材料及びマルコポーロの記述のみでなくアラピヤの旅行家、貿易業者、例へば、イブンバツダ・スレイマン其他も口を揃へて世界最大の都市は中國にあると云つてゐる。) 中國に於ける歴史的發達及び社會組織の特殊性によつて、その都市の人口は同期の發展段階にあるヨーロッパ、アメリカ、或ひはインドさえもの都市人口よりも、農村人口に對する比率が高い、と考ふべき根據がある。

中國人口の九〇—九二%が農業に従つてゐると云ふ主張はこれによつて見るに疑ひもなく大げさすぎる。併し農村人口が全人口の七〇%にすぎないと云ふ主張も小さすぎる。實際は略ぼこの中間のところであらう。我々は、帝國主義、資本主義的諸要素の強力的侵入以來、中國の都市人口が絶對的に且つ相對的に成長したか否か、農村の人口減少と都市の成長の過程が起つたか、また現在起つてゐるか、と云ふ問題をととりあつかつて見よう。我々が今後知るであらう様にこの點に於ては極度に複雑な過程が起つてゐる。無人の岩山に八十年間のうちに人口五十一萬四百四十人を有する大都市香港が生れた。貧弱な漁村のあつた場所に六十年間のうちに人口五十五萬を有する上海が生れた。大連の人口には一九一一年から一九二六年までに十二萬四千二人になり、それ以來この都市はまた一層急激に人口の増加を來し、一九二六年には二十萬三千九百の人口を有するに至つた。ハルピンの人口は一九一一年に三萬千、一九二一年に十三萬になり、一九二六年には十六萬四千九百になつた。この總額はそのまま進行してゐるであらう。直隸省に於ては、京漢線にそふて一九一四年より一九二六年までに小さ

なけちくさい二百戸あまりの村落から、人口四萬の一都市が生れてゐる。吉林、奉天、黑龍江は我々の眼の前で眞にアメリカ式のテンポで發達した。武漢三市の人口は一九〇一年に八十五萬、一九二一年に百四十六萬八千である。我々は明かに疑ひない事實として農村人口の減少、都市人口の増加を認めてよいらしく思はれる。然るに我々は同時に都市文化の最大の舊中心地の没落をも見るのである。

註一、香港、英國の植民地、併し經濟的には中國の一部、南支を犠牲にして成長す。

註二、大連は日本の「租借地」である。經濟的に滿洲に養はれ、それを犠牲にして成長した。

中國政府の擧げるところによるに、北京の人口は毎年一萬人づつ減つて行く。北京を犠牲にして天津の人口が増加しつつある。滿州の諸都市は直隸及び山東よりの移民によつて増加しつつある。福建省及び廣東省の都市は死滅しつつある。會て立派な首都であつた西安は貧弱な地方の小都市になつて了つた。而してその人口は一九二六年にかけて百萬から二十萬にも落ちて了つた。然るに一九二六年に西安はさらに十萬の人口を失つた。甘肅の省城、蘭州も同じく人口を減らした。福建省の省城、福州は、海關の材料によるに、一九〇一年に六十五萬人の人口を數えたが、一九二一年に三十二萬に減り、一九二六年に三十一萬四千に減つた。

海關報告は開港市に關する次の材料を收めてゐる。